

石崎地区遺跡群

曲り田周辺遺跡VI

—福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在遺跡群の調査報告—

二丈町文化財調査報告書

第20集

1998

二丈町教育委員会



序 文

本書は、昭和62年度から平成3年度まで実施した「歴史の里曲り田スポーツ公園」建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。

同遺跡の調査では、これまでに弥生時代の広形銅矛の鋳型の出土を始めとして、古墳時代初頭の集落跡、平安時代の製鉄炉群など多数の遺構が確認され、報告してきました。また、今回の報告書においては、平安期の比較的規模の大きい掘立柱建物群が出土した平成3年度調査地点分を記載しており、同遺跡に大規模な官営施設の存在を窺わせる調査と言えます。

こうした新しい資料が、二丈町のみならず、糸島地方の古代史の解明の一助となり、また、文化財保護活動に広く活用いただければ幸甚に存じます。

平成10年3月31日

二丈町教育委員会

教育長 小川 勇吉

例　　言

1. 本書は、福岡県糸島郡二丈町大字石崎字金江に所在する埋蔵文化財の調査の記録である。
2. 調査は、「歴史の里 曲り田スポーツ公園」建設に伴う事前発掘調査であり、国県補助を受け、二丈町教育委員会が実施した。
3. 本書に掲載した記録は、平成3年4月2日～平成3年5月24日まで行ったIX地点分の調査記録である。
4. 本書に掲載した遺構実測図は、古川、塩地潤一（別府大学4回生）が行い、写真撮影は古川が行った。また、空中写真撮影は、（有）空中写真企画に委託した。
5. 出土遺物の実測ならびに製図、遺物写真撮影は、須古井陽子（福岡大学2回生）の協力を得て、古川が行った。
6. 本書の執筆ならびに編集は古川が行った。

本文目次

	頁
I. はじめに	1
II. 発掘調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 出土遺構	5
3. 遺物包含層	12
4. 谷部包含層出土遺物（第13図～第31図）	13
III. 調査のまとめ	33
1. 遺構について	33
2. 出土遺物	33
3. 曲り田周辺遺跡の掘立柱建物群について	33
IV. おわりに	36

図版目次

図版 1 – a. IX 地区全景(丘陵西端を望む)

 b. IX 地区全景(真上から)

図版 2 – a. IX 地区全景(北側より)

 b. 1号掘立柱建物

図版 3 – a. 2号掘立柱建物

 b. 3号掘立柱建物

図版 4 – a. 製鉄遺構 検出状況

 b. フイゴの羽口 出土状況

図版 5 – a. 積石遺構 (検出状況)

 b. 積石遺構 (完掘状況)

図版 6 出土遺物 1

図版 7 出土遺物 2

図版 8 出土遺物 3

図版 9 出土遺物 4

図版 10 出土遺物 5

図版 11 出土遺物 6

図版 12 出土遺物 7

挿図目次

第1図	遺跡位置図 (S = 1 / 50,000)	2
第2図	付近遺跡位置図 (S = 1 / 5,000)	3
第3図	遺跡全体図 (S = 1 / 300)	折り込み
第4図	1号掘立柱建物実測図 (S = 1 / 80)	6
第5図	2号掘立柱建物実測図 (S = 1 / 80)	7
第6図	3号掘立柱建物実測図 (S = 1 / 80)	8
第7図	製鉄遺構配置実測図 (S = 1 / 40)	9
第8図	製鉄遺構断面図 (S = 1 / 20)	10
第9図	製鉄遺構周辺出土遺物 (S = 1 / 3)	11
第10図	積石遺構実測図 (S = 1 / 30)	12

第11図	積石遺構出土遺物実測図（S = 1 / 4）	13
第12図	トレンチ出土遺物実測図（S = 1 / 3）	14
第13図	谷部包含層出土遺物実測図1（S = 1 / 3）	15
第14図	谷部包含層出土遺物実測図2（S = 1 / 3）	16
第15図	谷部包含層出土遺物実測図3（S = 1 / 3）	17
第16図	谷部包含層出土遺物実測図4（S = 1 / 3）	18
第17図	谷部包含層出土遺物実測図5（S = 1 / 3）	19
第18図	谷部包含層出土遺物実測図6（S = 1 / 3）	20
第19図	谷部包含層出土遺物実測図7（S = 1 / 3）	20
第20図	谷部包含層出土遺物実測図8（S = 1 / 3）	21
第21図	谷部包含層出土遺物実測図9（S = 1 / 3）	22
第22図	谷部包含層出土遺物実測図10（S = 1 / 3）	22
第23図	谷部包含層出土遺物実測図11（S = 1 / 3）	24
第24図	谷部包含層出土遺物実測図12（S = 1 / 3）	25
第25図	谷部包含層出土遺物実測図13（S = 1 / 3）	26
第26図	谷部包含層出土遺物実測図14（S = 1 / 3）	27
第27図	谷部包含層出土遺物実測図15（S = 1 / 3）	28
第28図	谷部包含層出土遺物実測図16（S = 1 / 3）	29
第29図	谷部包含層出土遺物実測図17（S = 1 / 3）	30
第30図	谷部包含層出土遺物実測図18（S = 1 / 4）	31
第31図	谷部包含層出土遺物実測図19（S = 1 / 4）	32
第32図	石崎丘陵掘立柱建物配置図（S = 1 / 750）	34
第33図	曲り田出土の墨書き土器（S = 1 / 3）	35

I. はじめに

昭和62年度から継続している曲り田周辺遺跡の発掘調査は、平成2年度、3年度に実施した、IX地区（本報告分）をもって、その面的調査を終了した。同調査は、国庫補助を受けて実施し、平成3年4月2日より開始し、平成3年5月24日まで行っている。

発掘地点は、公園建設予定地である石崎丘陵西半分の内の北東斜面にあたり、その全域で、平安時代を主体とする遺構が確認されている。また、北側へ遺構が続きそうであったが、一部、業者による造成工事が成されていたために調査は断念せざるを得ず、面積的には2,600m²の発掘面積となった。また、同遺跡の報告書刊行事業については、平成2年度より開始し、今回の報告で、一応の区切りとなる。

同事業に携わった調査組織は下記のとおりである。

発掘調査（平成3年度）

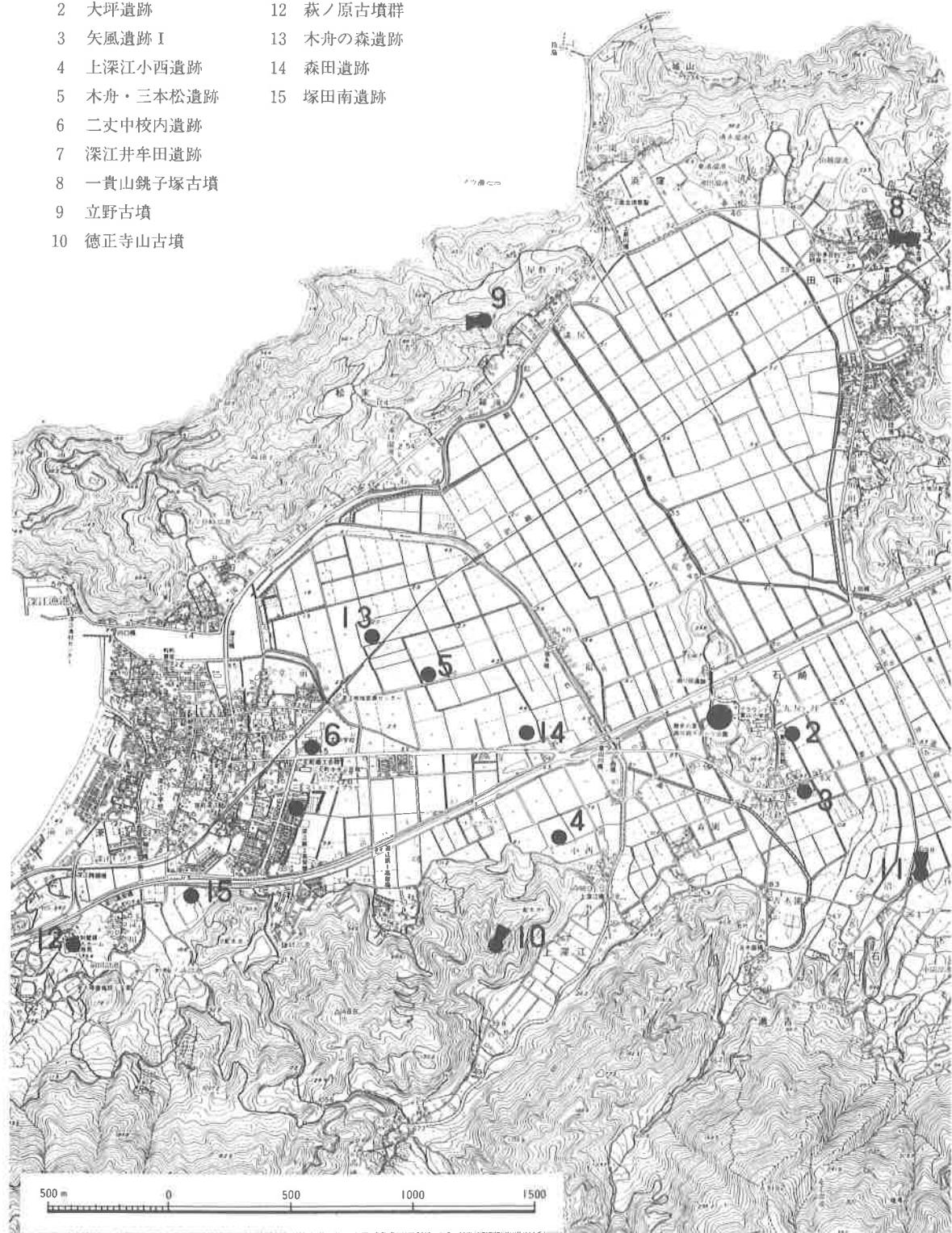
総括	二丈町教育委員会	教育長	吉村昌幸
		教育課長	庄島正
庶務		同和教育係長	宮崎晶之
		社会教育係長	松崎栄三
調査		社会教育係	古川秀幸
調査指導	福岡教育事務所	生涯学習課	中間研志

報告書刊行事業（平成9年度）

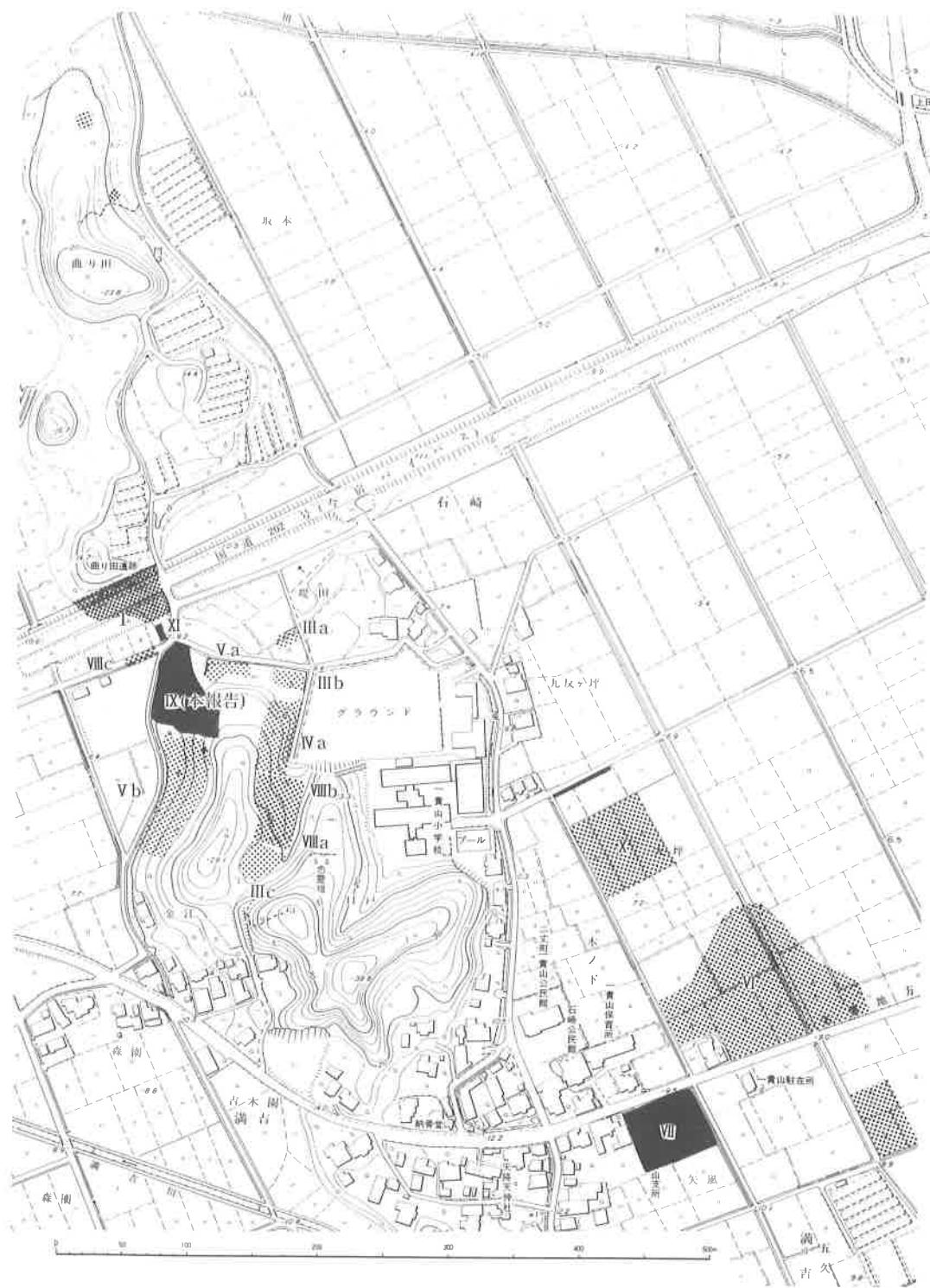
総括	二丈町教育委員会	教育長	小川勇吉
		教育課長	空閑俊明
庶務		社会教育係長	大庭一成
調査		社会教育係	古川秀幸

なお、調査時の遺構実測時においては、前原市教育委員会岡部裕俊氏、志摩町教育委員会河村裕一郎氏、別府大学学生塩地潤一氏の応援を受け、遺物整理、遺物実測には、福岡大学学生須古井陽子嬢にお世話になった。

- | | |
|------------|-----------|
| 1 曲り田周辺遺跡 | 11 二塚古墳 |
| 2 大坪遺跡 | 12 萩ノ原古墳群 |
| 3 矢風遺跡 I | 13 木舟の森遺跡 |
| 4 上深江小西遺跡 | 14 森田遺跡 |
| 5 木舟・三本松遺跡 | 15 塚田南遺跡 |
| 6 二丈中校内遺跡 | |
| 7 深江井牟田遺跡 | |
| 8 一貴山銚子塚古墳 | |
| 9 立野古墳 | |
| 10 德正寺山古墳 | |



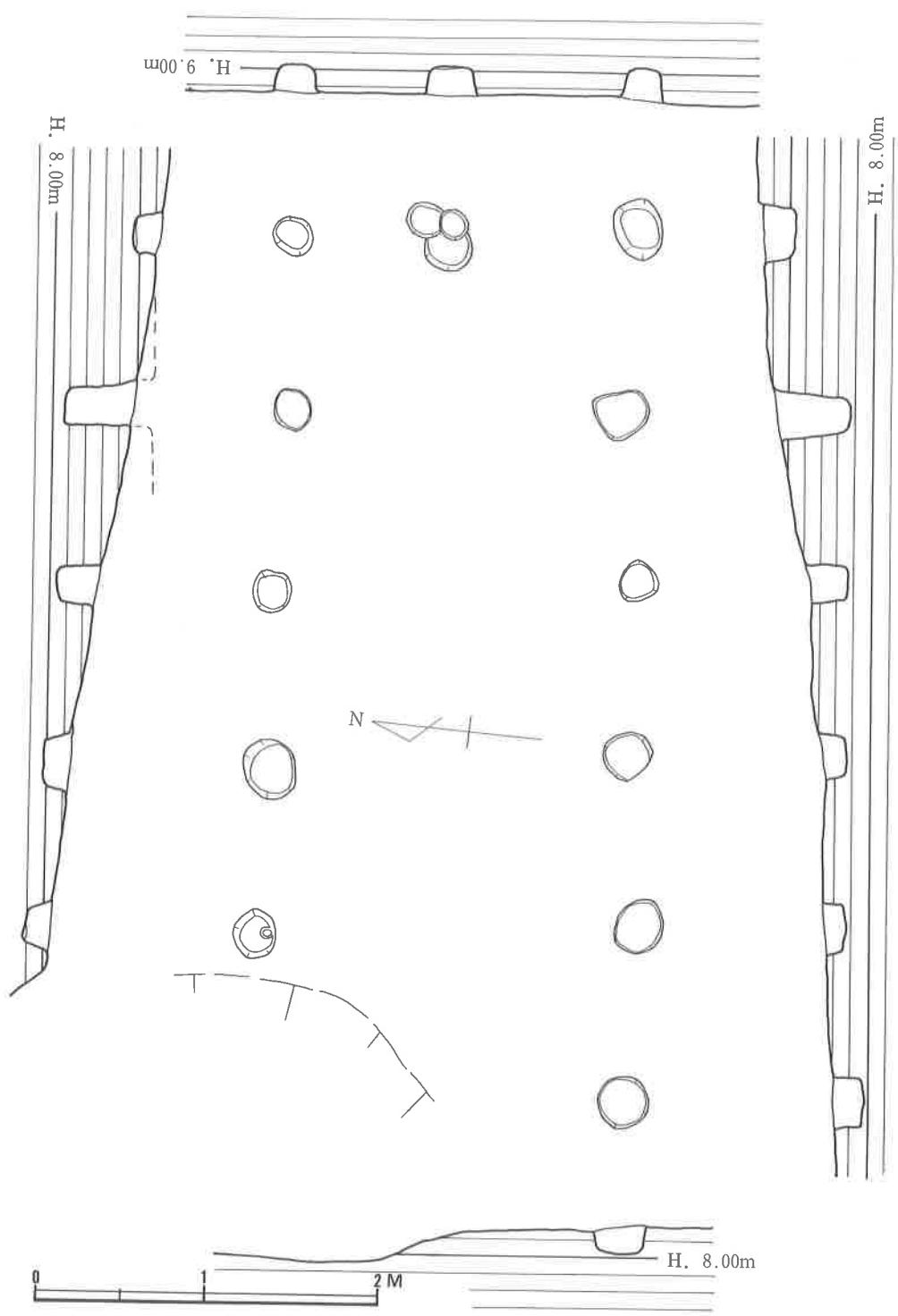
第1図 遺跡位置図 (S = 1 /50,000)



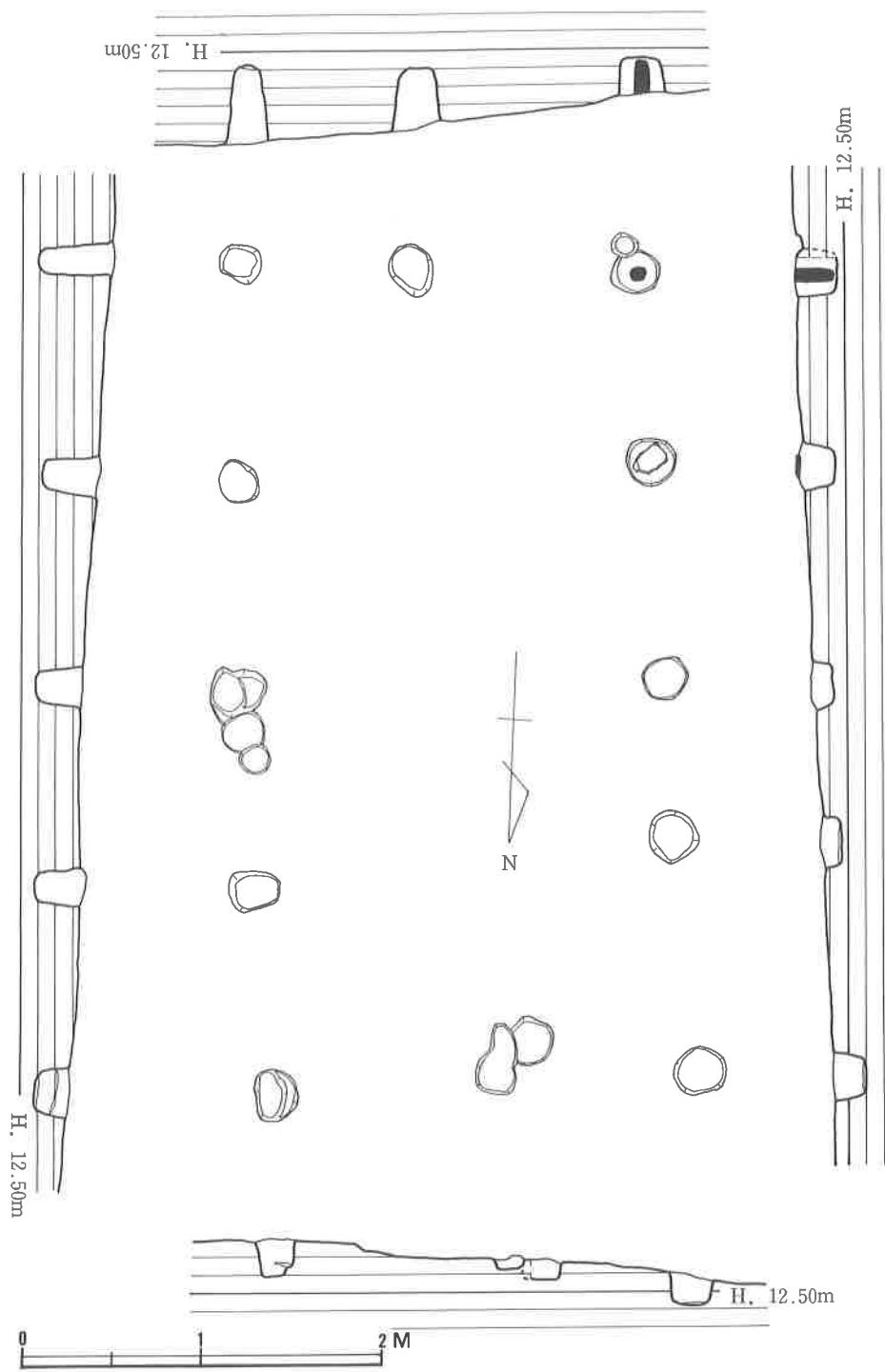
第2図 付近遺跡位置図 (S = 1 / 5,000)

第1表 石崎地区遺跡群発掘調査一覧

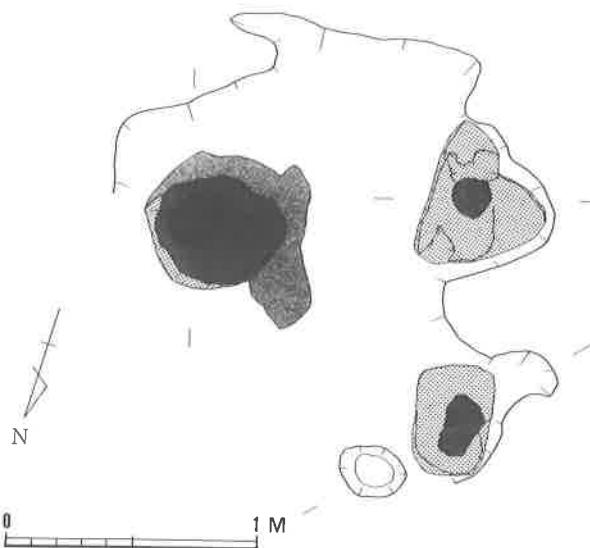
地点	遺 跡 名	原 因	調査年度	報 告 書	備 考
I	曲り田遺跡	国道202号バイパス建設	1980	『石崎 曲り田遺跡』 I II III 1983～1985	福岡県 教育委員会
II	曲り田遺跡	農協カントリー エレヴェーター建設	1985	『石崎 曲り田遺跡』 第2次調査 1986	二丈町 教育委員会
III	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1987	『曲り田周辺遺跡』 III 1993	二丈町 教育委員会
IVa	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1988	『曲り田周辺遺跡』 IV 1994	二丈町 教育委員会
IVb	曲り田周辺 遺跡	農協用地拡幅	1988	『曲り田周辺遺跡』 IV 1994	二丈町 教育委員会
V	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1989	『曲り田周辺遺跡』 I II 1991, 1992	二丈町 教育委員会
VI	大坪遺跡	県営圃場整備	1988	『大坪遺跡』 I 1995	二丈町 教育委員会
VII	矢風遺跡	農協支所改築	1989	未 報 告	二丈町 教育委員会
VIII	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1990	『曲り田周辺遺跡』 V 1996	二丈町 教育委員会
IX	曲り田周辺 遺跡	町運動公園建設	1991	今 回 報 告	二丈町 教育委員会
X	大坪遺跡	県営圃場整備	1992	『大坪遺跡』 II 1995	二丈町 教育委員会
XI	曲り田周辺 遺跡	町運動公園進入道建設	1993	未 報 告	二丈町 教育委員会



第5図 2号掘立柱建物実測図 ($S = 1/80$)



第6図 3号掘立柱建物実測図 ($S = 1/80$)



第7図 製鉄遺構配置実測図 ($S = 1/40$)

製鉄遺構 (第7図)

谷中央部に位置し、積石遺構の西に隣接する。検出した炉は3基であり、形は崩れてい るものの、全て円形を呈していたものとなり そうで、鍛冶炉と考えられる。

1号炉

南から北へ傾斜する緩斜面に3基隣接して 作られているもので、最も東側に位置してい る。径 $55\text{cm} \times 45\text{cm}$ を測る長楕円形を呈す炉で、 南側外縁は 10cm 程焼けて赤変している。

2号炉

緩斜面西側に位置するもので、現状では $55\text{cm} \times 50\text{cm}$ の三角形を呈す。北側が崩れているが、元は円形を呈していたものと考えられ、炉の 外周が 10cm 程焼けて、赤変している。また、楕円形ではないものの中央部の熱変が著しい。

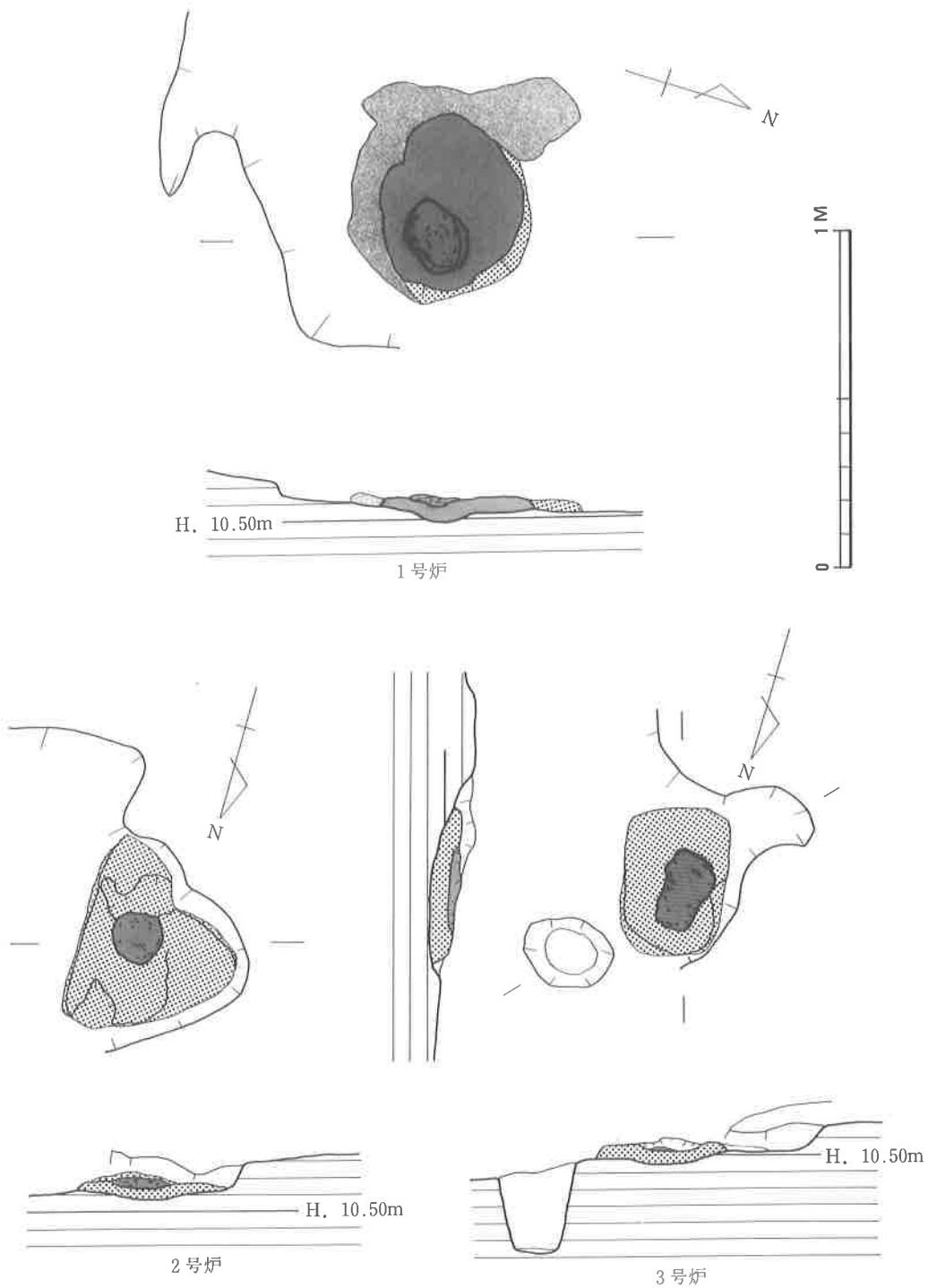
3号炉

緩斜面北側に位置するもので、現状では $45\text{cm} \times 30\text{cm}$ の隅丸方形を呈す。やはり、本来は、円 形炉となるものであろう。北側の部分が僅かに焼け、赤変している。

製鉄炉検出付近出土遺物 (第8図)

1～5は製鉄炉を検出した緩斜面で、炉の下方(北側)において、集中して出土した遺物である。図化したものは僅かであるが、他に鉄滓も数点出土している。

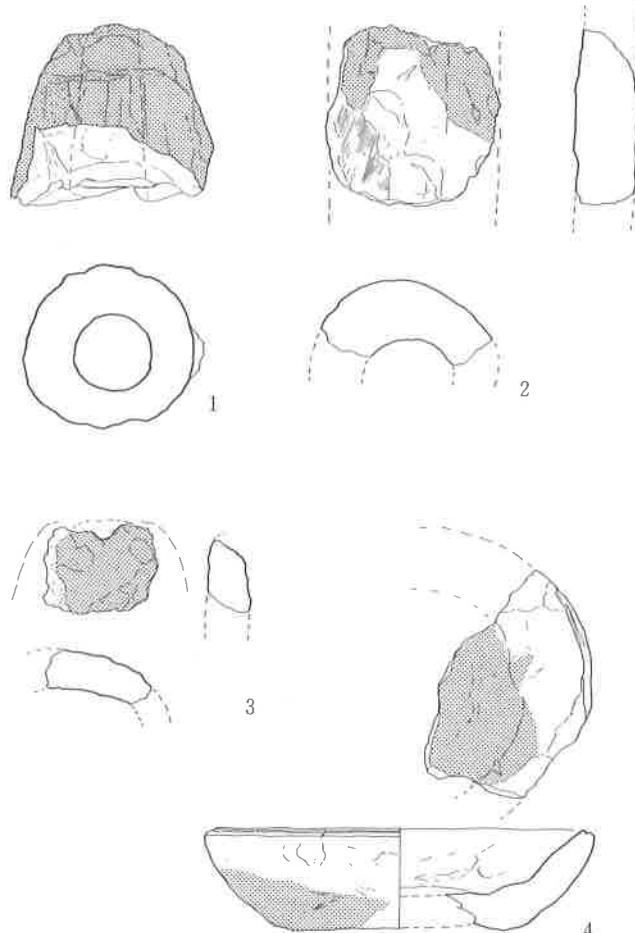
1～3はフイゴの羽口である。1は炉体に近い部分であり、器壁がガラス質状となっている。 現存長 6.7cm 、外径 $6.4\text{cm} \times 6.8\text{cm}$ 、内径 $3.0\text{cm} \times 3.1\text{cm}$ を測り、円形を呈す。2は中央に近い部 分の破片であり、現存長で 7.2cm を測る。3も破片資料であるが、全体が黒変しており、孔の 感じからも、壁体に近い部分と考えられる。現存長で 6.8cm を測る。4は土師器椀片である。 色調は茶褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。焼成は良であるが、外面は非常に脆い。器高 4.0cm 、復元口径 14.7cm 、復元底径 8.3cm を測り、形状のわりに器壁が厚く、調整はナデのみで ある。また、内底が焼け、黒変しており、出土位置から見ても製鉄に関連したものであろうか。 5は加熱による変化は認められないが、炉の壁体と考えられるものである。現存長 7.2cm 、幅 6.0cm 、厚さ 2.5cm を測り、内側に薺束状の痕跡が認められ、付着していたものであろう。



第8図 製鉄遺構断面図 ($S = 1/20$)

積石遺構（第10図）

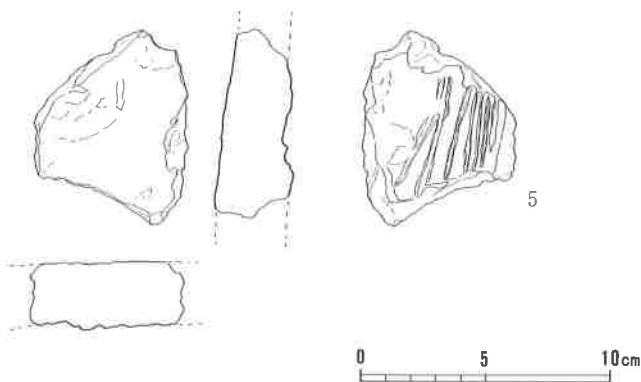
谷部中央で検出したもので、用途は不明である。形状は、人頭大の石を方形に組んだものと考えられるが、基底石部分のみの検出であり、上部構造等全容は把握できない。また、積石西側には、幅34cm、深さ7cmの溝が検出された。遺物としては、平瓦片、棒状石製品が出土しているが、明確な時期が特定できるものはなく、平瓦の特徴より、14世紀が上限として考えられるが、近世墓の可能性も歪めない。



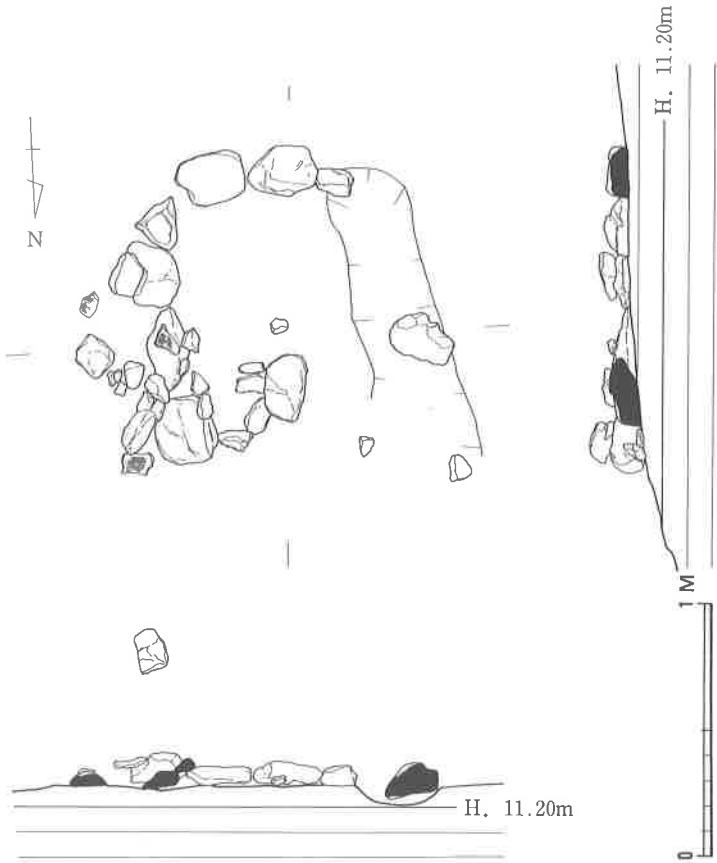
積石遺構出土遺物

（第11図）

6～10は積石の間で出土した瓦片であり、石に転用して積んでいたものと考えられる。6、7は平瓦片であり、厚さ2cm程と薄い。色調は灰白色～灰色を呈し、焼成が甘く、胎土には砂粒が僅かに含む。凹面は布目痕、凸面に



第9図 製鉄遺構周辺出土遺物（S=1/3）



第10図 積石遺構実測図 (S = 1 / 30)

10.1cm、幅4.1cm、厚さ3.5cmを測る。

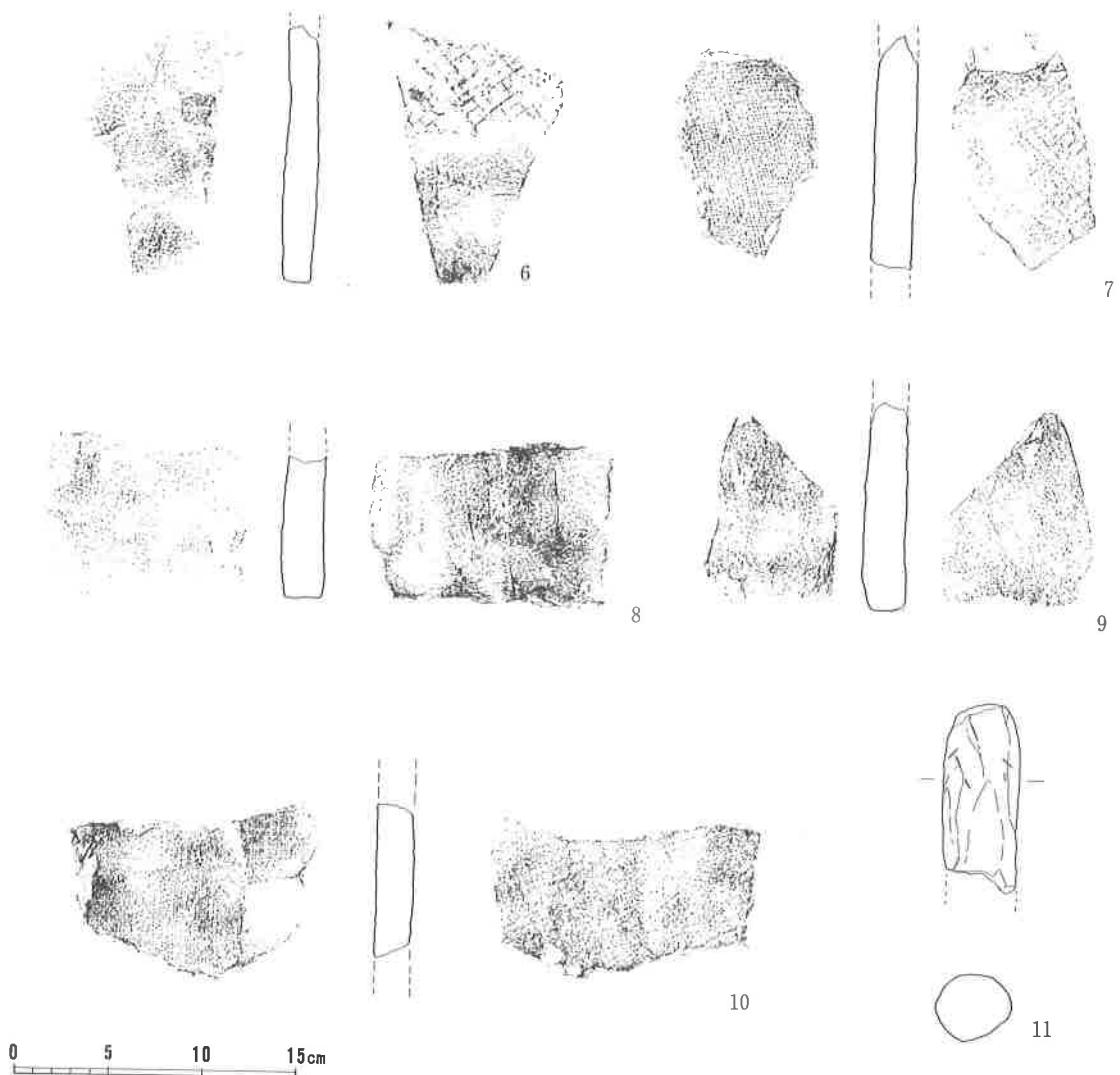
は斜格子の叩打具痕が残る。8はやや厚めの平瓦であり、色調は灰色、焼成は良く、胎土に含まれる砂粒が多い。凹面は布目痕が残り、凸面は面取りを施している。9も同様のものであるが、凸面はナデが強く施され、面取りが不明瞭である。10は焼成が甘く、淡褐色を呈すもので、胎土に含まれる砂粒もかなり多い。凹面は布目痕、凸面には斜格子の叩打具痕が残る。11は積石の内側で出土した棒状の石製品であり、石材は玄武岩である。全面丁寧に磨かれているが砥石とは考えにくく、用途は不明である。現存長

3. 遺物包含層

調査の概要でも記したとおり、遺構は、丘陵西側の緩斜面にあたり、南から北へと走る谷部の南肩部から中央部に集中している。このため、遺構面直上には比較的厚い遺物包含層が形成されており、その時期についても弥生時代前期～平安時代にわたるもので、平安時代初頭のものが主体を占めていた。以下、時代、器種ごとに順次説明を加えたい。

谷部トレンチ出土遺物（第12図）

12、13は谷部中央に設置したトレンチ出土の土器である。12は8世紀末の土師皿である。色調は黄白色を呈し、胎土には微砂粒を若干含む。焼成は不良であるが、器壁はしっかりとされている。内外面、板ナデ後ナデ調整である。器高2.7cm、口径10.8cm、底径6.8cmを測る。13は平底を呈す小形の瓶であり、調整は全体的に板ナデ後ナデ調整を施す。色調は明褐色を呈し、胎



第11図 積石遺構出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

土には微砂粒を若干含む。焼成不良。現器高5.8cm、底径4.0cmを測る。時期は8世紀末であろう。

4. 谷部包含層出土遺物 (第13図～第31図)

弥生～古墳期の遺物

14は弥生中期後半代の壺形土器口縁部片であり、断面逆L字形を呈す。15は5世紀代の壺形土器であり、器形が二重口縁となるものであろう。16は弥生後期前半の袋状口縁壺片であり、

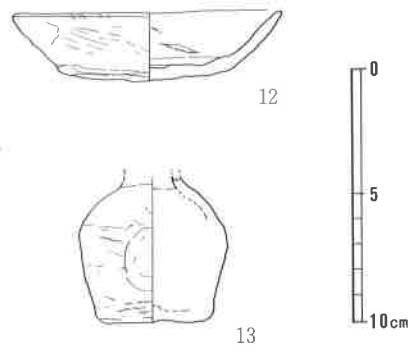
比較的小ぶりである。17は小形の甕形土器で、内外面、細かいハケ目調整後、ナデを施す。18は頸部のしまりのない甕形土器で、内外面、板ナデを施す。19、20は頸部のしまりが強い甕形土器であり、外面ハケ目調整後、ナデ、内面ケズリを施す。共に古墳時代初頭であろう。21～23は所謂、「布留式」の甕口縁部片であり、口縁端部は丸く収めている。21がやや古相を呈す。24～30は高坏である。24、25は器壁が厚く、外面ハケ調整を施すものである。時期は弥生中期代。26は坏部片で、胴下部より屈曲し、口縁端部に平坦面を持つ。内外面ハケ調整。30は小片であるが、同類であろう。27、28は脚部で全体的に丁寧なナデを施す。29は直線的に伸びる棒状を呈すもので、外面には板ナデを施す。時期は5世紀前半であるが、29はやや新出のものであろう。31は椀形土器で、底部は丸底気味である。内外面板ナデ後ナデ調整を施し、内底には指頭圧痕が顕著に残る。32、33は須恵器である。

32は破片資料ではあるが、比較的全容が判るもので、復元口径13.6cmを測る小ぶりのものである。頸部上位には、凸帶を持ち、その下には、しっかりとした櫛描きの波状文を施入する。色調は暗灰色で、口縁内側に自然釉を被る。時期は5世紀前半である。33はややシャープさに欠けるもので、波状文も粗い。32に比べ、やや新出である。34は破片資料であり、全容は不明ではあるが、瓶と考えられる。胴中位に握手を持ち、外面には細かい叩きを施し、内面には青海波の當て具痕が残る。色調は青灰色である。

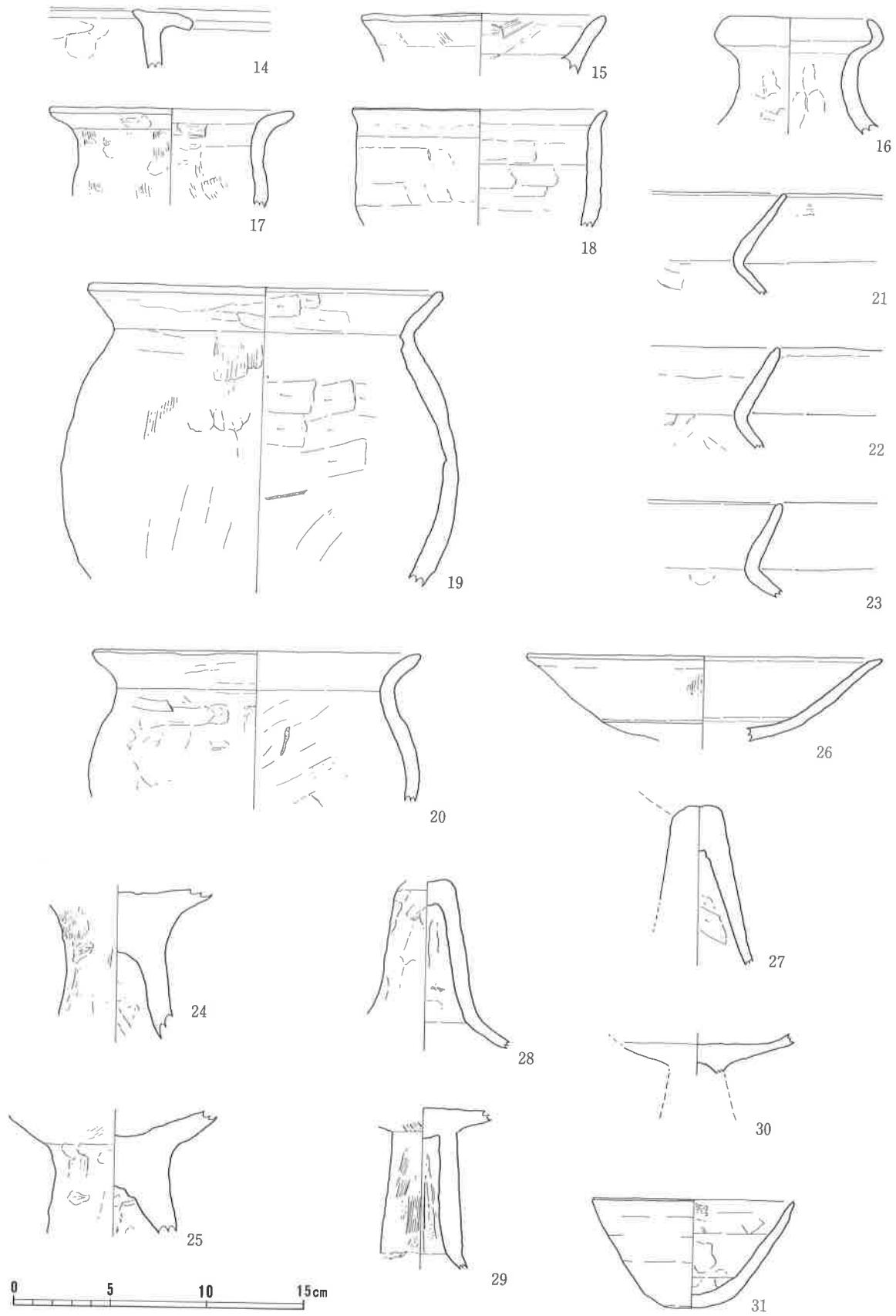
奈良～平安期の遺物

土師器（坏・椀）

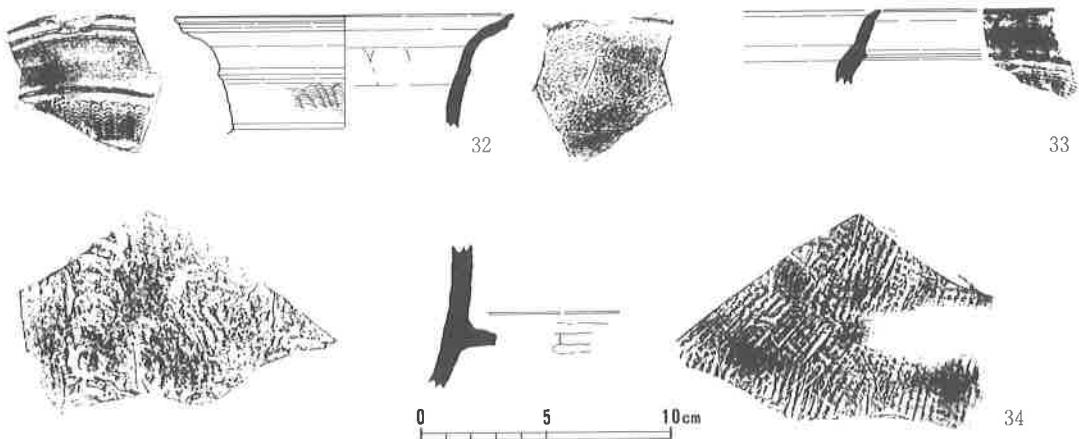
35は紙面の関係上、この項に割付ているが、古墳時代前半のものであろう。器形は半円形を呈し、底部はやや稜を持つ丸底である。口縁付近、板ナデ後ナデ、それ以外はナデ調整である。36～54は奈良時代末～平安時代の坏であり、曲り田遺跡及び同周辺遺跡より、かなりの量が出土している。36は直線的に開く体部をもち、口縁端部を丸くおさめる。底部はへラ切り後ナデである。37は比較的に底径、口径が大きく、体部の開きが緩いもので、やや古い様相を呈す。38～40は直線的に開く体部をもち、口縁端部を丸くおさめる。41～48はやや小型の杯であり、41、45は底径の割りには、口径が小さいもので、やや後出的なものと考えられる。46、47は口縁下がナデ調整により、やや内湾しているものの、体部が直線的に開くタイプと同一のものであろう。底部にはへラケズリの痕跡が顕著に残っている。49～50は36と同タ



第12図 トレンチ出土遺物実測図
(S = 1 / 3)



第13図 谷部包含層出土遺物実測図1 ($S = 1/3$)



第14図 谷部包含層出土遺物実測図2 (S = 1 / 3)

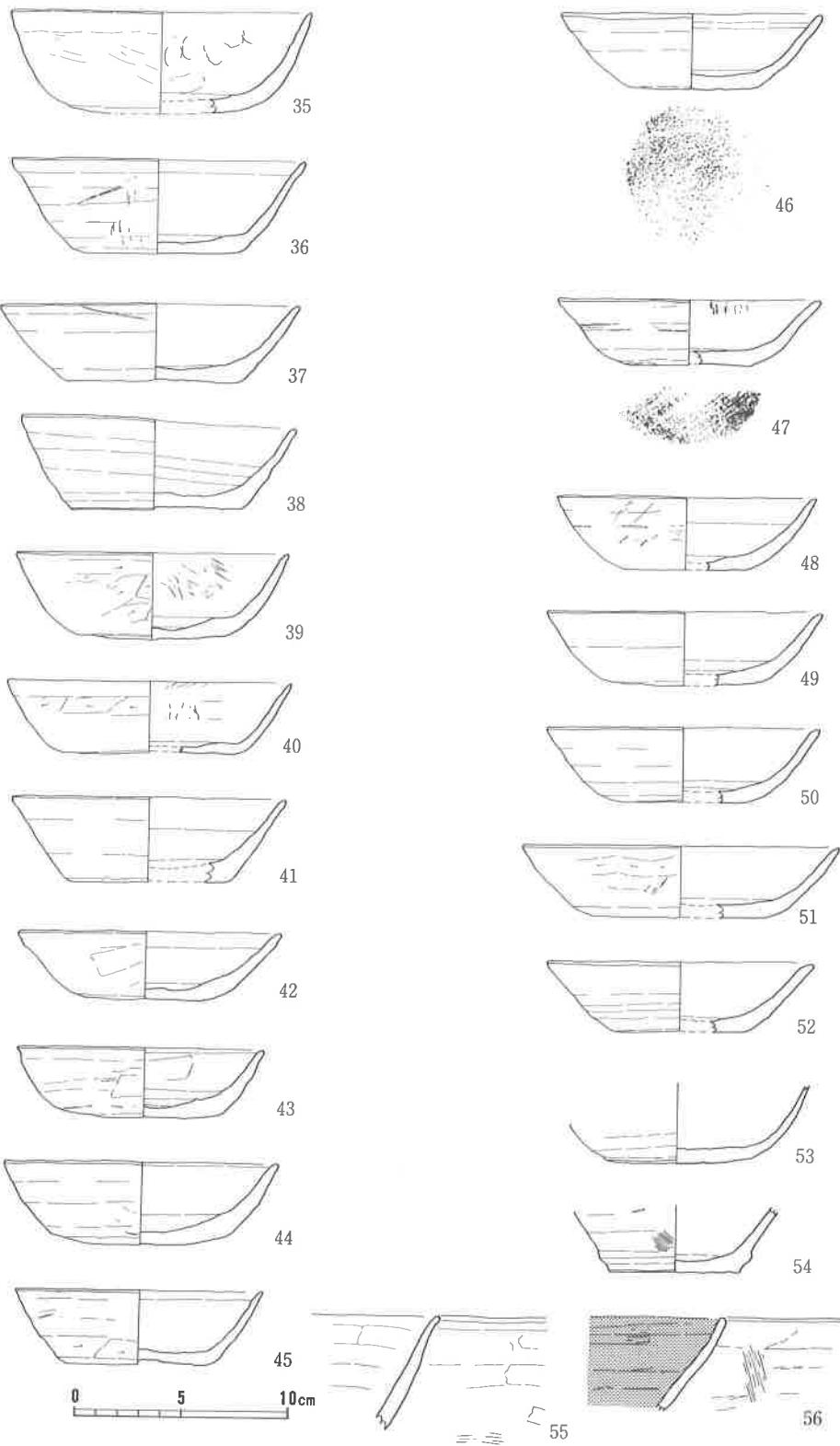
イプである。51は器高が低く、口径、底径が大きいもので、時代的には下っているものと考えられる。

35は5世紀前半代、37、44は8世紀後半代、36、38~40、49、50、52は9世紀前半代、42、43、45~48は9世紀の中頃、41は同後半代、51は12世紀前半代と考えている。

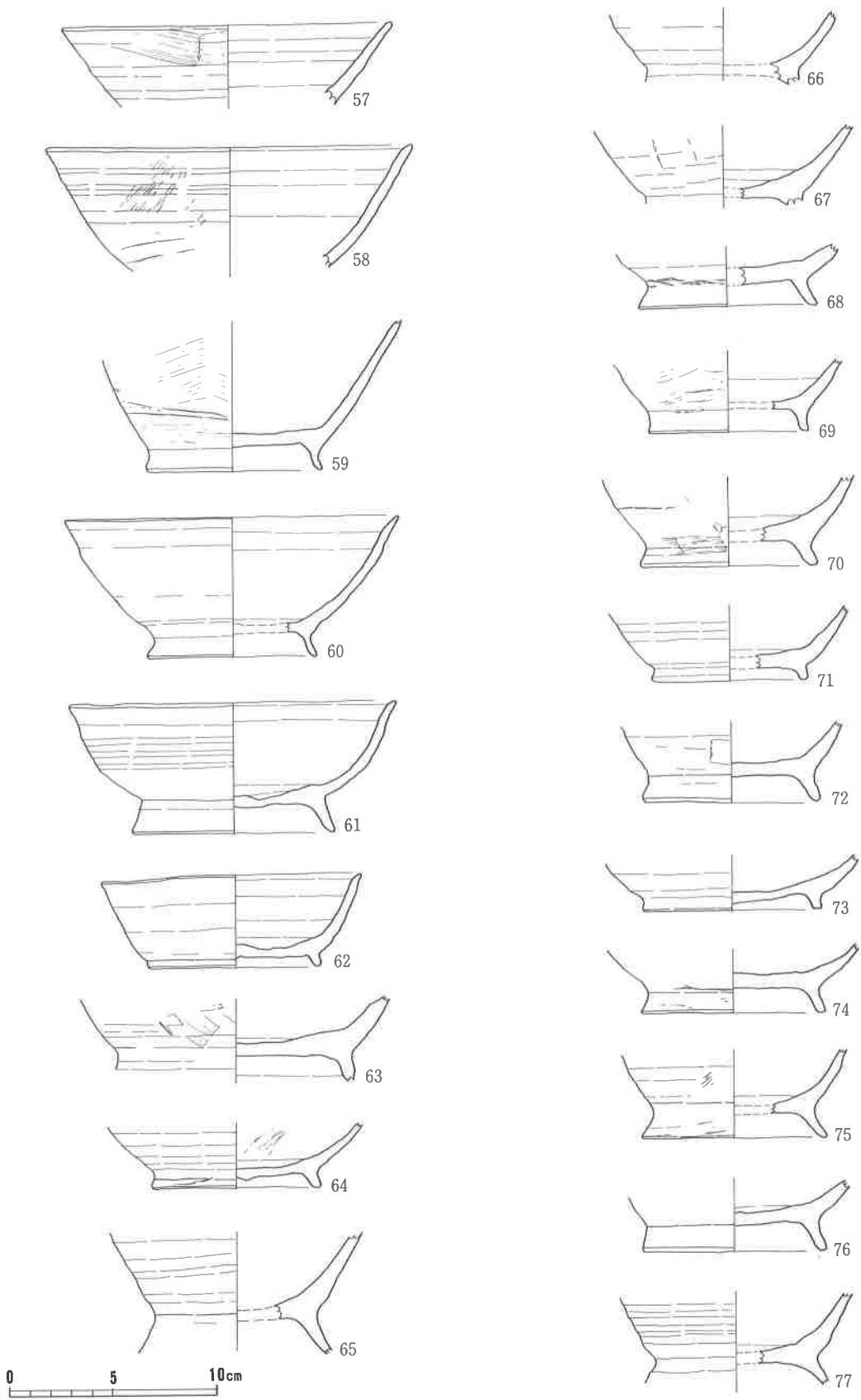
57~77は高台付の椀及び杯である。57は体部が直線的に開くもので、口縁端部は丸くおさめられている。破片資料で、全容は確認できないが、やや高めの高台が付くものであろう。58は丸みが強い体部であり、口縁端部は、ナデ調整により平坦面を持っている。59、60は低めの高台を有すもので、体部は比較的丸みをもつ。59は板ナデによる工具痕が顕著に観察でき、60は全体的に丁寧にナデを施している。61は高台の径が大きく、体部が浅いタイプのものである。体部中央にナデ調整による凹線状の稜線が入り、口縁端部はやや平坦面を持っている。62は小ぶりのもの杯である。口径、高台径共に小さく、高台の形態も同時期の須恵器と同じである。63以降は高台、体下部の破片資料である。63は高台の径が大きいもので、体部も浅目のものとなろう。64、67~71、73は高台の低いタイプ。65、72、74~77は高いタイプであり、後出的なものである。すべて、8世紀末~9世紀代の特徴を示すものである。

土師器（内黒土器）

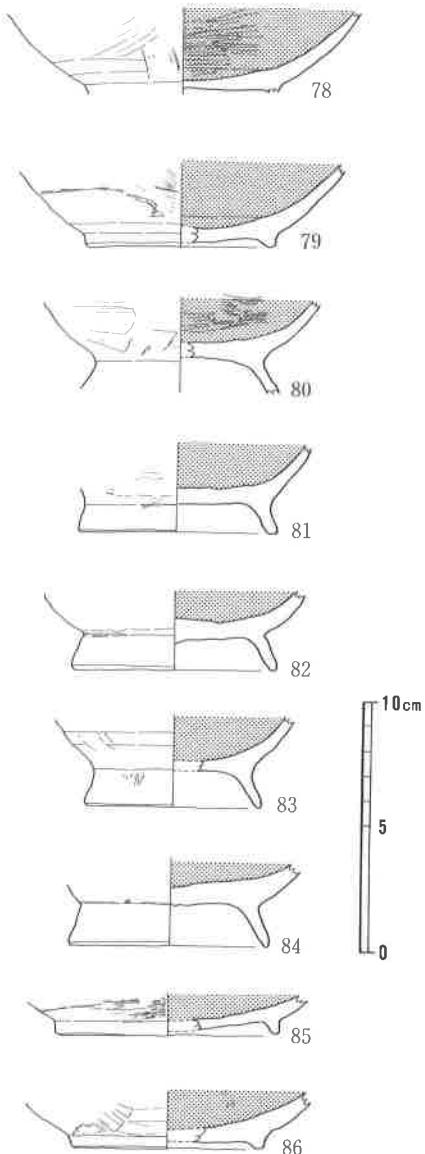
78~86は内黒土器であり、全て、高台付の杯である。78は直線的に開く体部に低めの高台が付くものであろう。外面ナデ調整、内面は横方向のミガキを施す。79、85、86は高台の低いもので、内外面板ナデ後ナデ調整を施す。79の外面には、工具によるものと思われる痕跡が認められる。80~84は高めの高台を有するものであり、後出的なものである。80の内面は、横方向のミガキ調整が施され、それ以外は、内外面共に板ナデ後ナデ調整を施す。



第15図 谷部包含層出土遺物実測図3 (S = 1 / 3)



第16図 谷部包含層出土遺物実測図4 (S = 1 / 3)



第17図 谷部包含層出土遺物実測図 5
(S = 1 / 3)

100は口径31.2cmを測るやや大型のもので、頸部のしまりは、殆どない。外面ナデ調整、内面ケズリを施す。102~108は口径17.0cm~23.0cmを測る小型のものである。102、107、108は体

土師器（高坏）

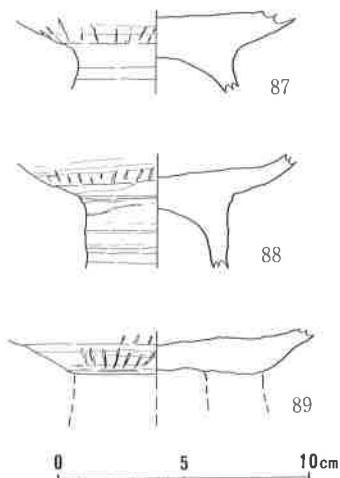
87~89は高坏である。全て、坏部と脚部の境目付近の破片資料であり、全容は不確かであるが、棒状の脚部に水平に近い坏部が付くものであろう。坏下部には、ヘラ状工具による連続の刺突文が入る。調整は、内外面ナデ調整であるが、脚部は横方向に丁寧にナデている。全て9世紀代であろう。

土師器（皿）

90~99は土師皿であり、91のみ高台付の皿である。90は器高2.2cm、口径13.4cm、底径6.6cmを測るもので、体部は直線的で、底部より上外方へ伸びる。内外面ナデ調整である。91は90に高台が付くもので、高台は1.0cmと低い。92は器高2.0cm、口径13.4cm、底径8.4cmを測る小型のもので、底部あたりの器壁は比較的厚い。内外面ナデ調整で、口縁端部は丸くおさめる。93~95は口径14.5cm前後、底径11cmを測るもので、体部中央に稜線が認められる。内外面ナデ調整で、口縁端部は丸くおさめる。96~99は口径16.5cm前後、底径13cm前後を測るもので、96、97は体部が直線的となり、98は体部下部に稜線が入る。99は底部に回転ヘラケズリの痕跡が明瞭に認められる。時期については、90、91は8世紀後半、92は8世紀末、93~99は9世紀代であろう。

土師器（甕）

100~110は奈良末~平安初頭の甕形土器である。100は口径26.2cmを測る中型のもので、体部はやや丸みを帯び、頸部のしまりは弱い。口縁端部は丸くおさめ、体上部より器壁が厚くなる。外面、板状工具によるナデ調整、内面縦方向へのケズリを施す。

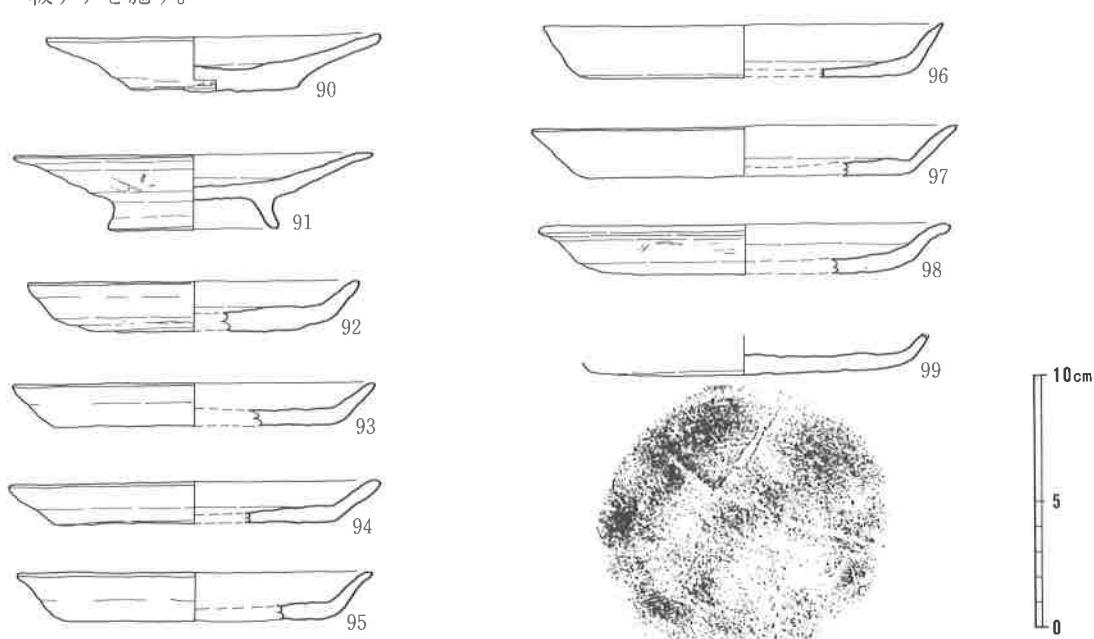


第18図 谷部包含層出土遺物実測図 6 (S = 1 / 3)

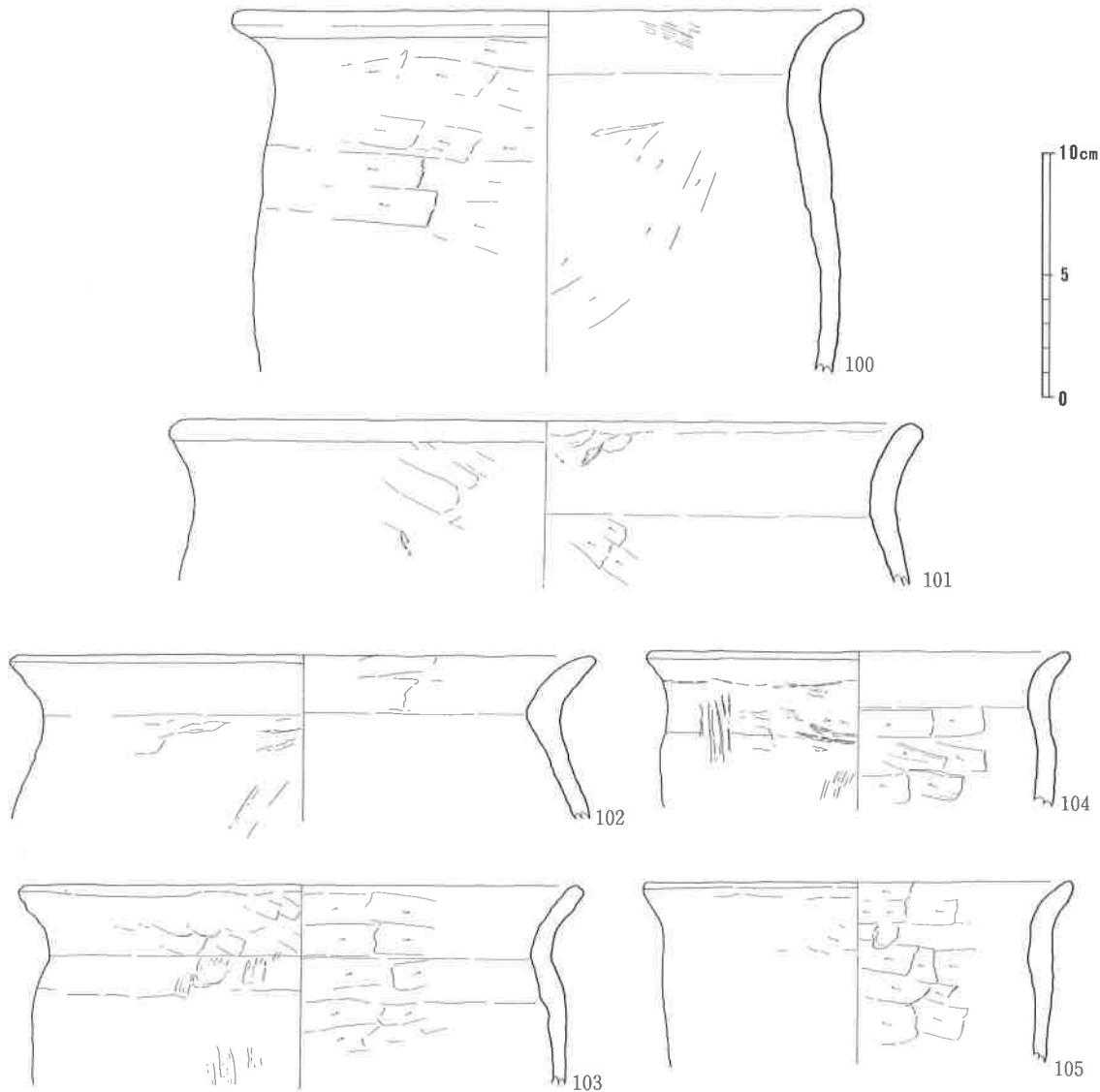
部がやや丸く、頸部のしまりが強いもので、外面ナデ調整、内面ケズリを施す。103、104、106は頸部のしまりが弱く、肩部より直線的となる体部を呈す。外面の調整は基本的に板ナデ、ナデであるが、調整自体は粗い。105は体部が頸部以下、直線的となるもので、頸部のしまりは、殆どない。109、110は高台が付くもので、胎土、焼成など、他と違う精製された感じを受ける。109はやや丸みを帯びた体部に小さめの口縁部が付くもので、1.4cmと高台は低い。内外面、丁寧なナデ調整で、高台との接合部分のみ、板ナデを施す。110は105に近い甕に高台が付くものであり、高台も3.1cmと高い。頸部付近、横方向への板ナデ、体下部はミガキを施す。内外面、粘土の接合痕が、顕著に観察できる。時期は、すべて9世紀代であろう。

土師器（移動式竈）

111は移動式竈である。破片資料であり、傾きなど確証はないが、図上で復元すると口径27cm、器高35cm程となる。窓の部分は広く、底部が剝離した痕跡が認められる。外面ナデ、内面板ナデを施す。



第19図 谷部包含層出土遺物実測図 7 (S = 1 / 3)

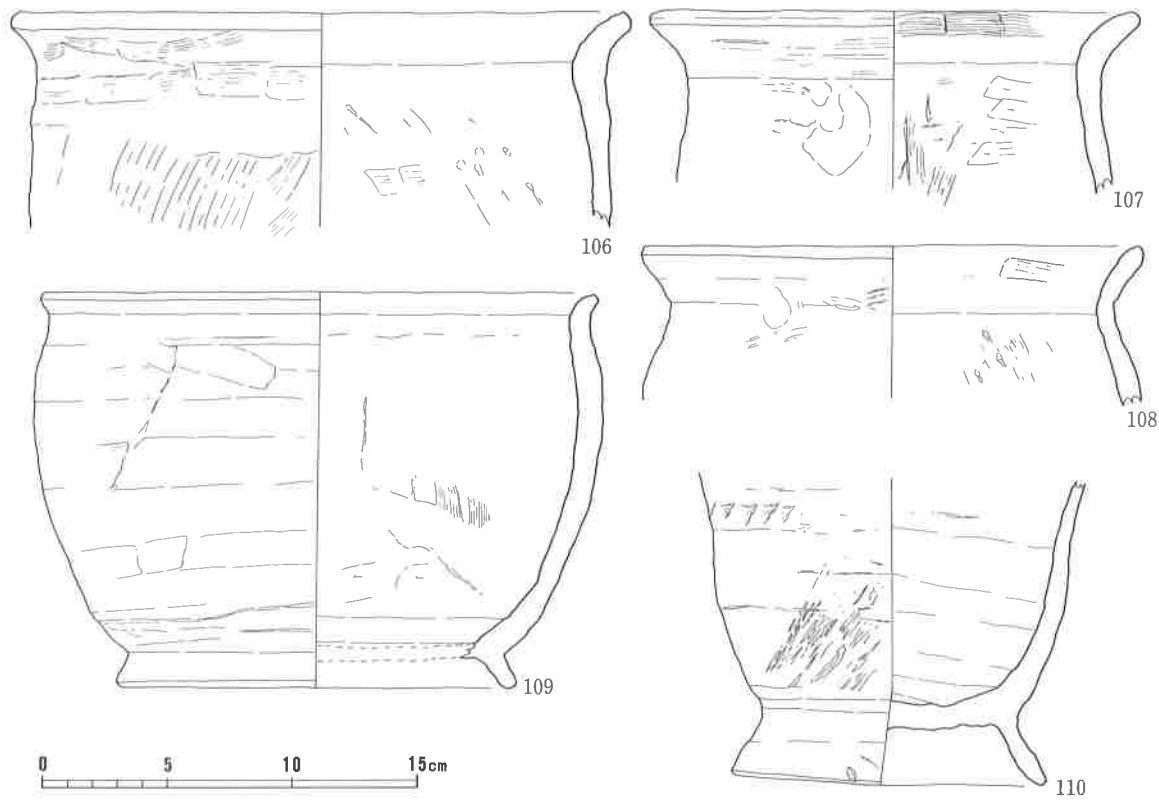


第20図 谷部包含層出土遺物実測図8 (S = 1 / 3)

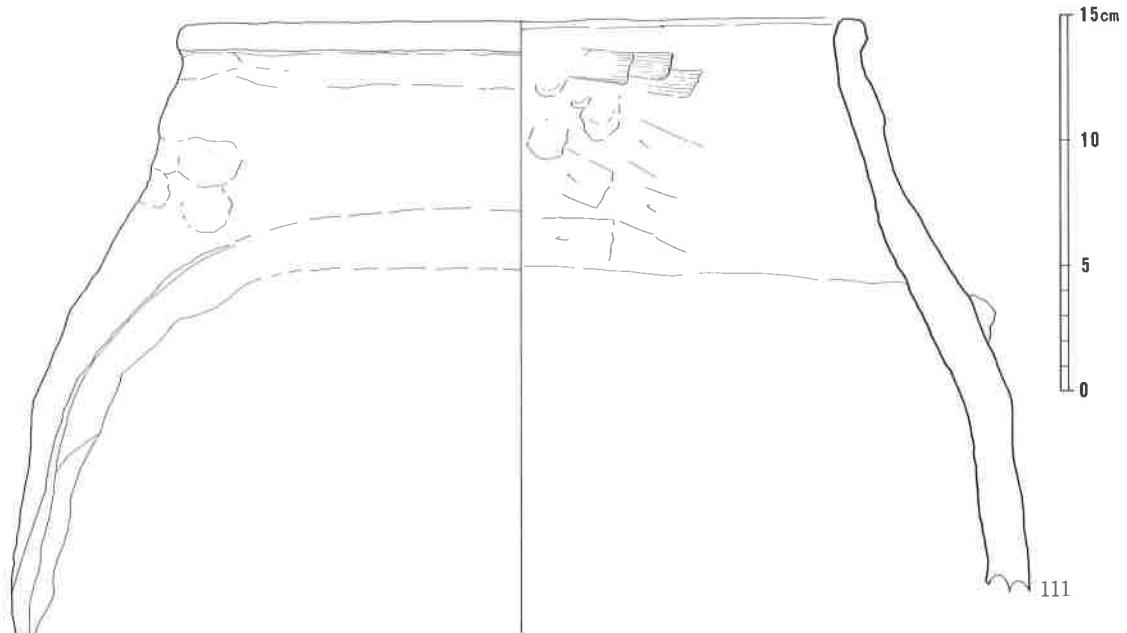
須恵器（壺蓋）

112～154は包含層出土の須恵器壺蓋である。112は7世紀末であろう。器高2.4cm、口径14.0cmを測るもので、口縁端部は丸く、内側に返りが付く。外面回転ヘラケズリを施す。113～115は宝珠のつまみが付くもので、116～124もそれであろう。

125～132は須恵器壺で、高台が付かないものである。器高は3.0cm～4.0cm、口径13.0cm～14.0cm、底径7.6cm～9.0cmを測り、外面回転ヘラケズリを施す。133～141は、高台が付くものである。133は器高5.2cm、口径17.0cm、底径10.0cmを測るやや大きめのものである。体部は丸みを帯び、高台は低めであるが、しっかりとしている。134～154は器高4.7cm、口径13.0cm、底径6.0cm～8.0cm前後を測る小型のものである。時期については、8世紀末～9世紀代であろう。



第21図 谷部包含層出土遺物実測図9 (S = 1 / 3)



第22図 谷部包含層出土遺物実測図10 (S = 1 / 3)

須恵器（皿）

155～163は包含層出土の須恵器皿である。155～159は器高は2.1cm、口径14.8cm～16.0cm、底径11.0cm～12.8cmを測るもので、色調は灰色～灰白色を呈し、焼成は良好。胎土には、砂粒を若干含む。160、161は口径12.0cm前後、底径9.0cm以下を測る小型のものである。161の底部には、回転ヘラ切りの際の工具痕が顕著に観察できる。162、163は口径17.0cm以上、底径14.0cmを測る大型のものである。すべて、9世紀代であろう。

須恵器（壺・鉢）

164～169は包含層出土の須恵器の壺と鉢である。164は底部に近い部分であり、底部は高台が付くものであろう。166は底径15.2cmを測る中型のものである。内外面、ヘラケズリ後ナデ調整で、外面には粘土の接合痕が顕著に観察できる。167は短頸壺の口縁付近であり、胴部は丸みを帯び、頸部は直線的に立ち上がる。口縁端部は丸く収められている。168は胴部であり、167と同類の口縁部が付くものであろう。

須恵器（甕・瓶）

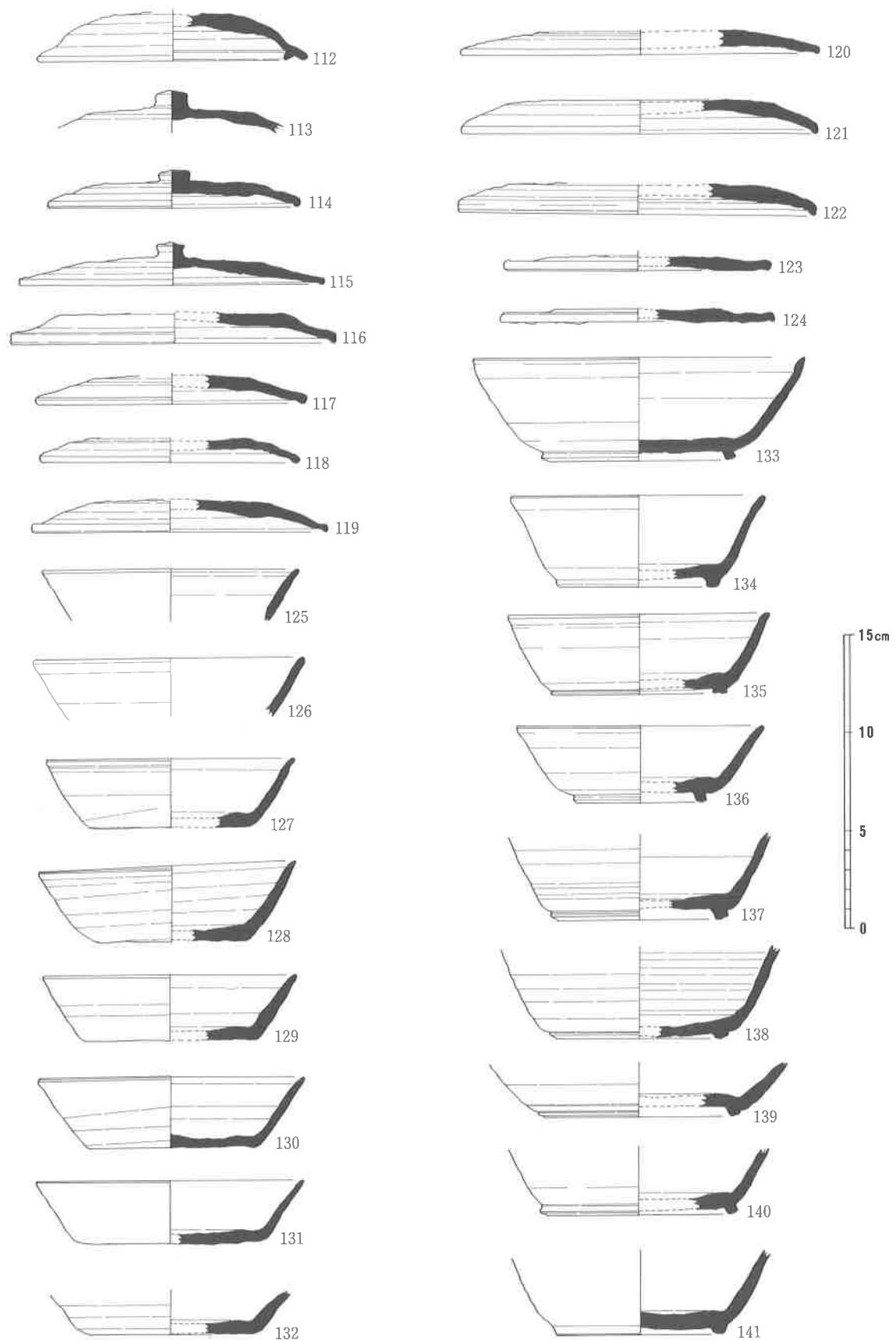
170～178は包含層出土の須恵器の甕と瓶である。170、171、175、176は口縁径21cm～23cmを測るもので、口縁端部はヨコナデにより面を持たせている。172は頸部が直線的に立ち上がり、外反して口縁に至るもので、端部は平坦面を持つ。178は口縁径が33cmを越すもので、口縁端部は丸くおさめる。177は小型の長頸の瓶であろう。時期はすべて9世紀代と言える。

磁器

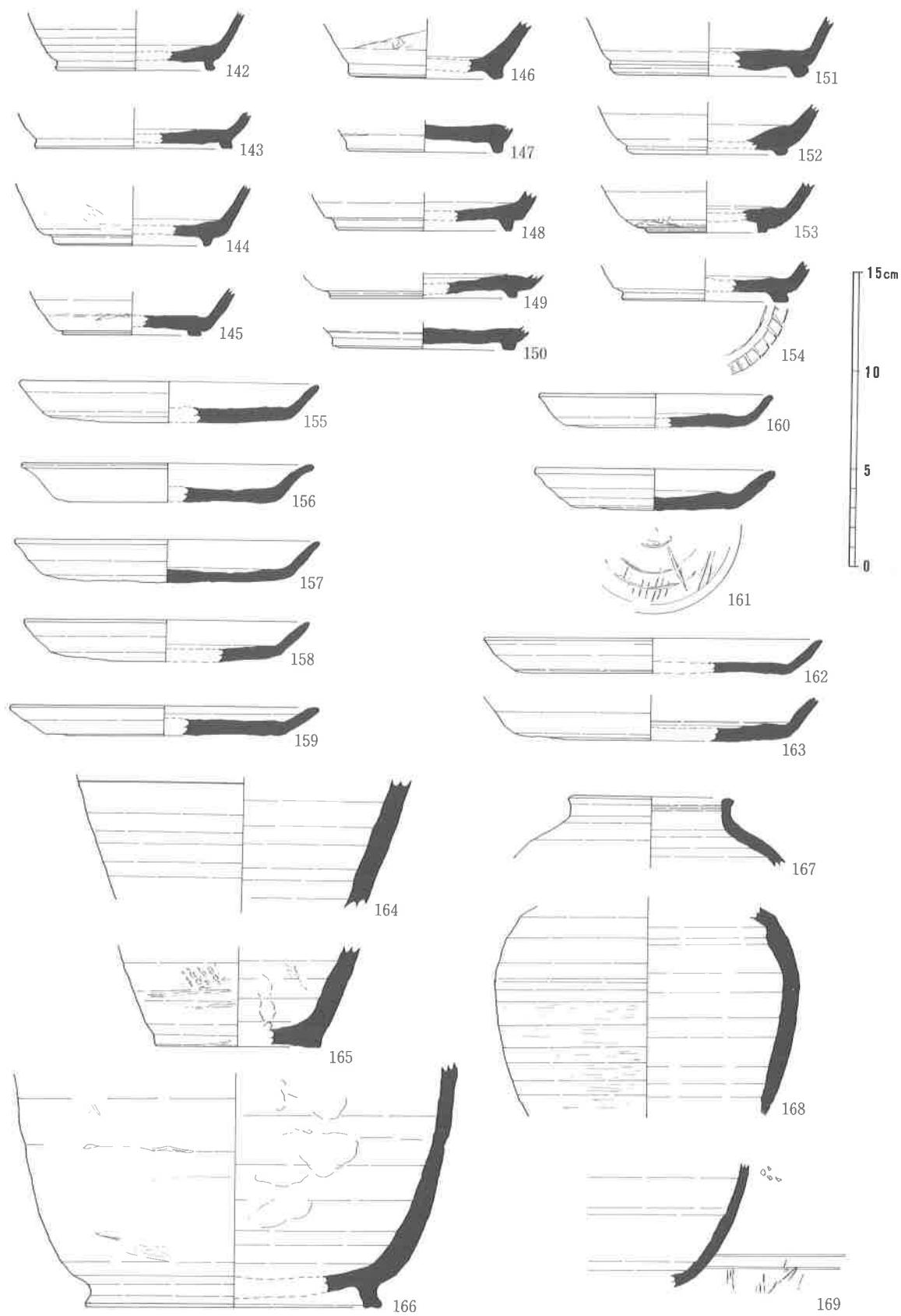
179～213は包含層出土の磁器である。179～184、189、191、196～200は越州窯の碗である。体部は丸みを持ち、高台は蛇の目高台である。色調は小豆色を呈し、体部上半分から内面にかけて、山吹色の釉薬をかける。また、体部下半分は裸体のままである。胎土には微砂粒を若干含み、焼成は良好である。口縁径16.5～19.0cm、底部径9.0cm、器高6.0～6.5cmを測る。

188、190、192、201、204、206、207、209、210、211は緑釉陶器の碗である。色調は灰色を呈し、黄緑色の釉薬をかける。胎土は精良な粘土を使用しているため、砂粒はほとんど含まれず、焼成は良好である。188は口縁部分であり、口径12.6cmを測る。体部は直線的で、口縁端部は丸くおさめている。内外面ヨコナデ調整。201、204、210は体下部から底の部分であり、高台はシャープである。206、207、209、211は高台が蛇の目を呈す。

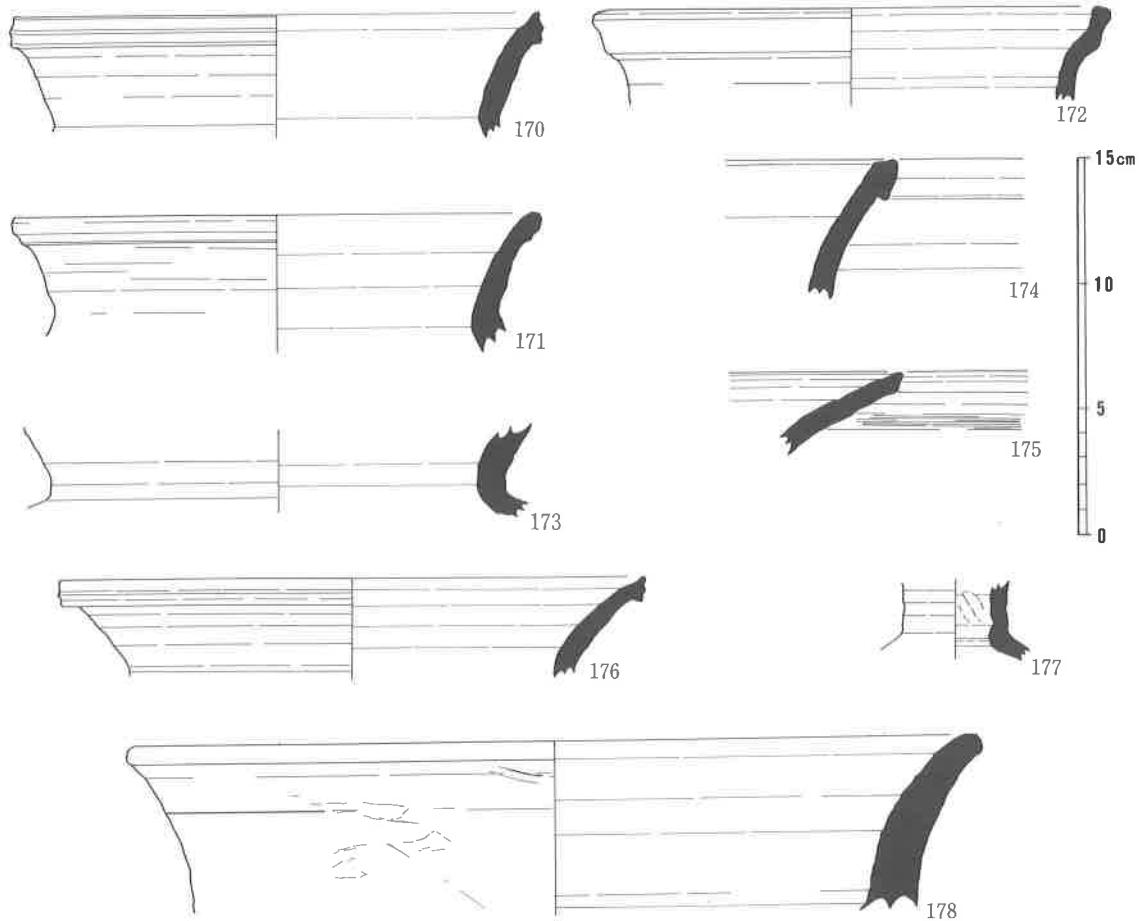
186は口縁径13.2cm、底径6.2cm、器高4.6cmを測るもので、内外面、深緑色の釉をかける。203は底径9.0cmを測る碗であり、内外面、深緑色の釉をかける。見込み部分には、指おさえに



第23図 谷部包含層出土遺物実測図11 (S = 1 / 3)



第24図 谷部包含層出土遺物実測図12 (S = 1 / 3)



第25図 谷部包含層出土遺物実測図13 (S = 1 / 3)

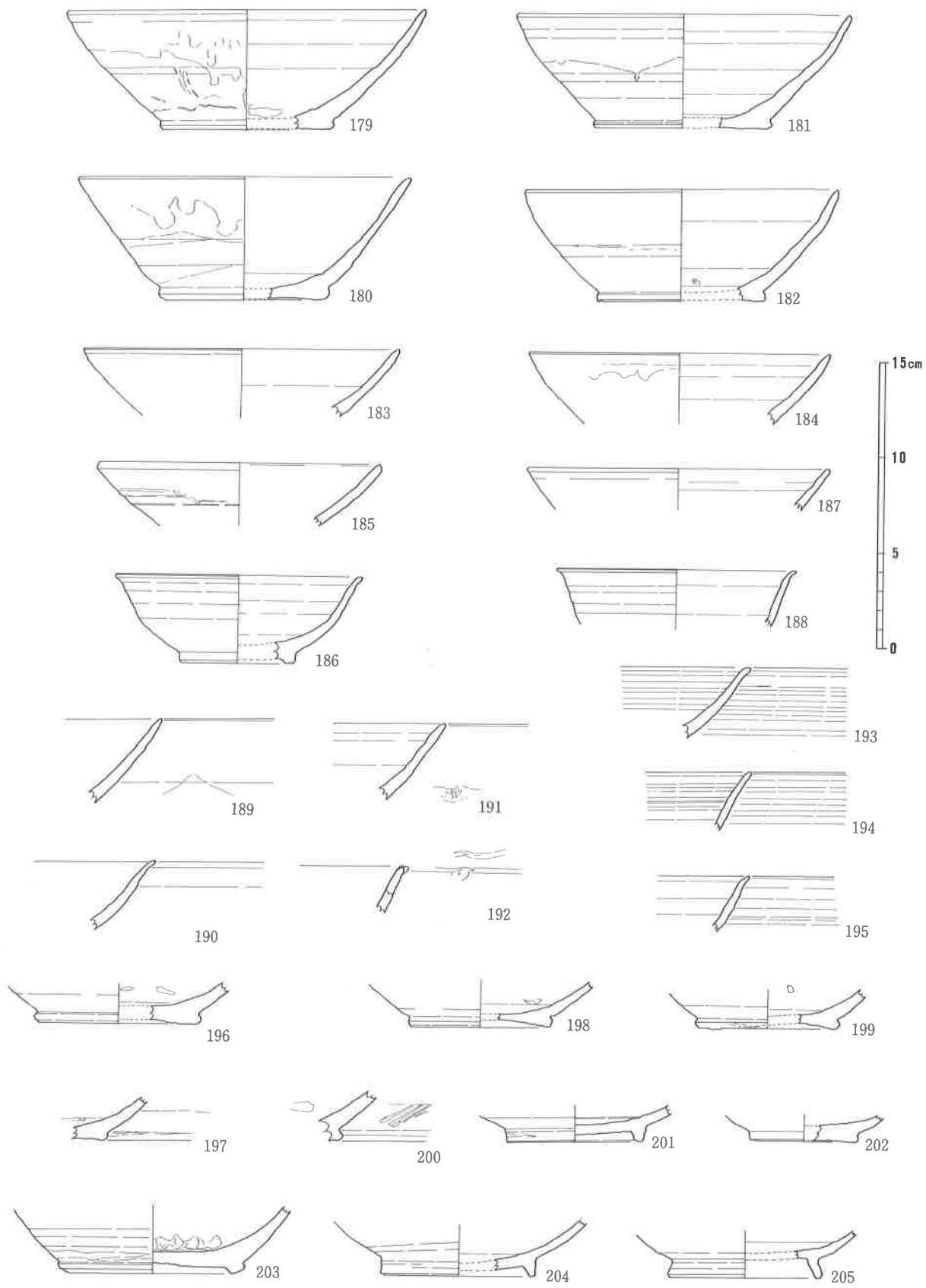
よる指頭圧痕が顕著に観察できる。

212は蓋のつまみの部分であろうか。色調は灰色を呈し、深緑色の釉をかける。

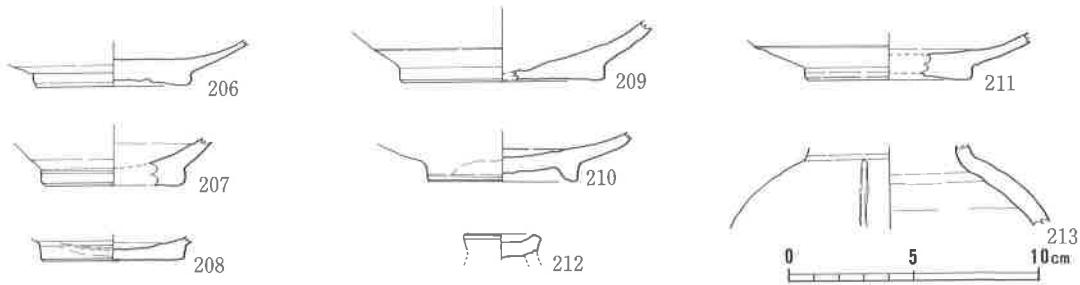
213は越州窯の瓶である。

土錘・石錘

214～225は土錘、226、227は石錘で、いずれも包含層出土のものである。土錘は6.0cm～7.0cm、幅2.5cm前後を測る比較的大きめのものであり、紐ずれの痕跡が顕著に観察できる。226の石錘は、分銅形のもので、中央部とその上の2カ所に孔を穿つ。長さ3.4cm、幅2.1cm、厚さ1.3cmを測る。滑石製。227は長楕円形を呈す石錘で、中央部に溝を通す。長さ3.1cm、幅1.5cm、厚さ0.9cmを測る。滑石製。



第26図 谷部包含層出土遺物実測図14 (S = 1 / 3)



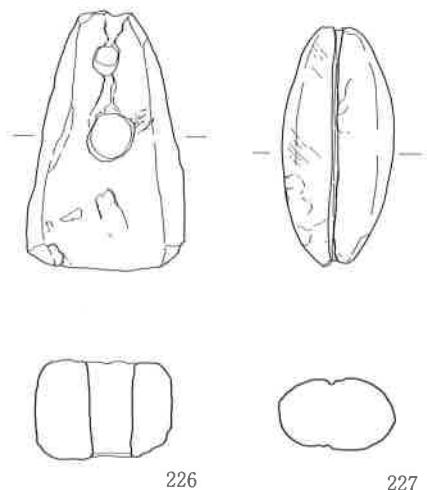
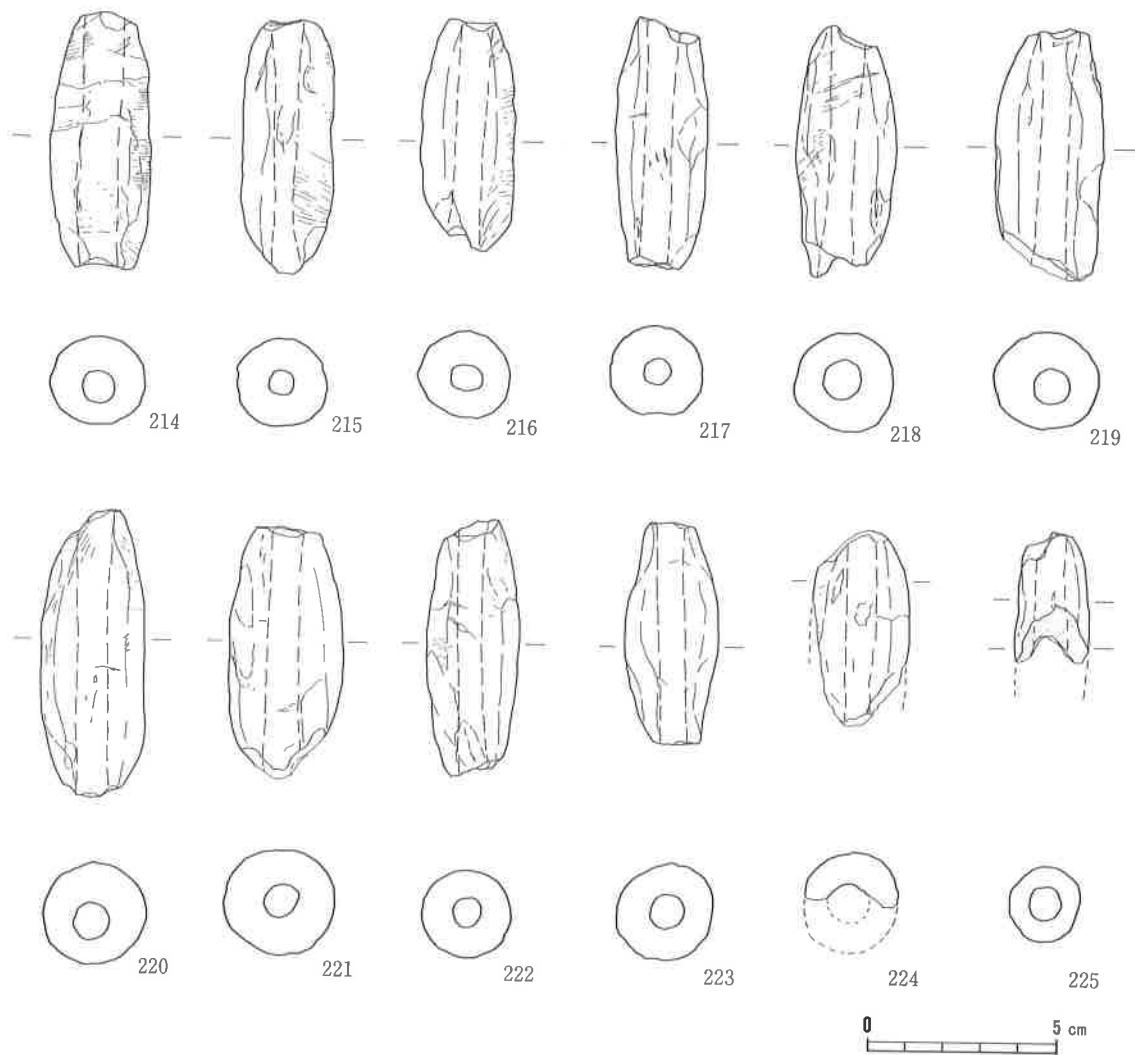
第27図 谷部包含層出土遺物実測図15 (S = 1 / 3)

石器

228～236は包含層出土の石器である。228は玄武岩製の石斧であり、現存長14.4cm、幅5.1cmを測る。229は粘板岩製の磨製石斧片であり、現存長9.5cm、幅6.7cmを測る。230～232は硬質砂岩製の砥石である。233は用途不明の石製品である。滑石製の石鍋の握手部分を転用したものである。234も滑石製の石鍋を転用したもので、握手部分に孔を穿ち、溝を刻む。形態からみると石錘に転用したものであろう。235も滑石製石鍋の転用品であり、握手部分を摘まみとし、孔を穿つ。当て具として使用したものであろうか。236は滑石製の石板であり、用途は不明である。長さ17.8cm、幅12.8cmを測る長方形を呈す。上面は平坦となるが、中央に窪みが認められる。厚さ4.3cmと厚く、砥石とは考えにくい。

瓦237～252は、谷部包含層出土の瓦であり、主に2号掘立柱建物周辺より出土している。数的には、パンケース1箱程度の少量であり、建物に伴うものとは考えられない。当遺跡以外の場所より持ち込まれたものであろう。しかしながら、比較的大きな破片のものもあり、近隣に瓦を葺くような建物が存在していた事は十分考えられ、今後の調査に期待を持たせる資料と言えよう。

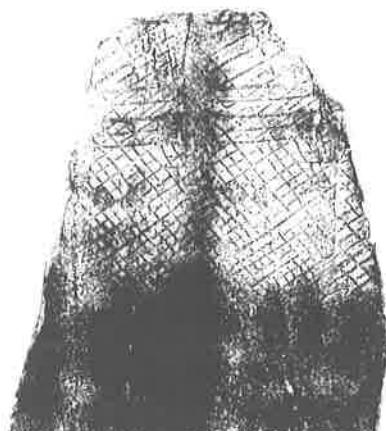
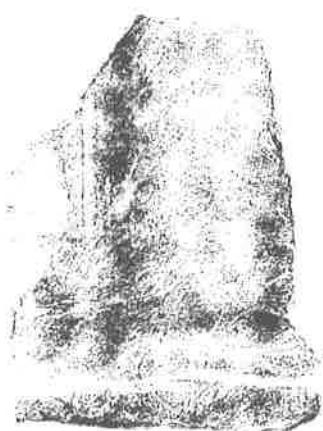
237～250は平瓦であり、凹面は布目、凸面は格子目の叩きを施す。237、243は比較的全容が判るもので、14世紀代のものと考えてよい。249は丸瓦である。破片資料であり、全様は不明である。251は巴文軒丸瓦であり、中央に右回りの巴文を施し、その外側に連珠文を配している。時期的には江戸期以降の新しいものであろう。外面の一部に縄状の叩き痕が認められ、内面は布目である。



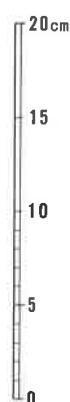
第28図 谷部包含層出土遺物実測図16 (S = 1 / 3)



第29図 谷部包含層出土遺物実測図17 (S = 1 / 3)



237



238



239



241

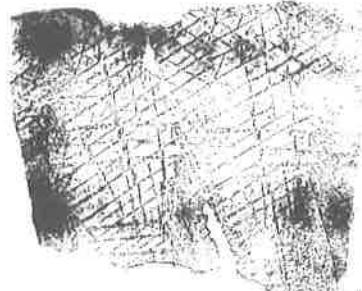
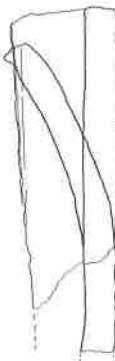
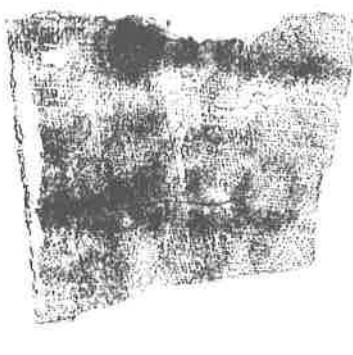


240

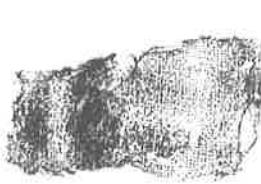


242

第30図 谷部包含層出土遺物実測図18 (S = 1 / 4)



243



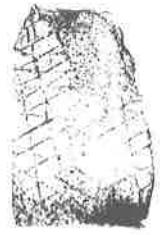
244



245



246



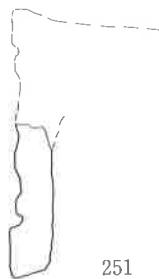
247



248



250



251



249

第31図 谷部包含層出土遺物実測図19 (S = 1 / 4)

III. 調査のまとめ

本遺跡の発掘調査における成果は、以下に記すとおりである。

1. 遺構について

掘立柱建物

本遺跡からは3棟の掘立柱建物が検出された。規模的には、2間×5間、2間×4間のもので、1号、3号は東西方向、2号は南北に主軸を持って、規則的に立っている。詳細については、次項に譲りたい。

製鉄遺構

谷部中央において、3基の製鉄遺構を検出した。同丘陵においては、IIIa地区において1基、IIIb地区において3基が確認されており、丘陵鞍部北西斜面が、炉を築くのに最適地であった事が窺われる。

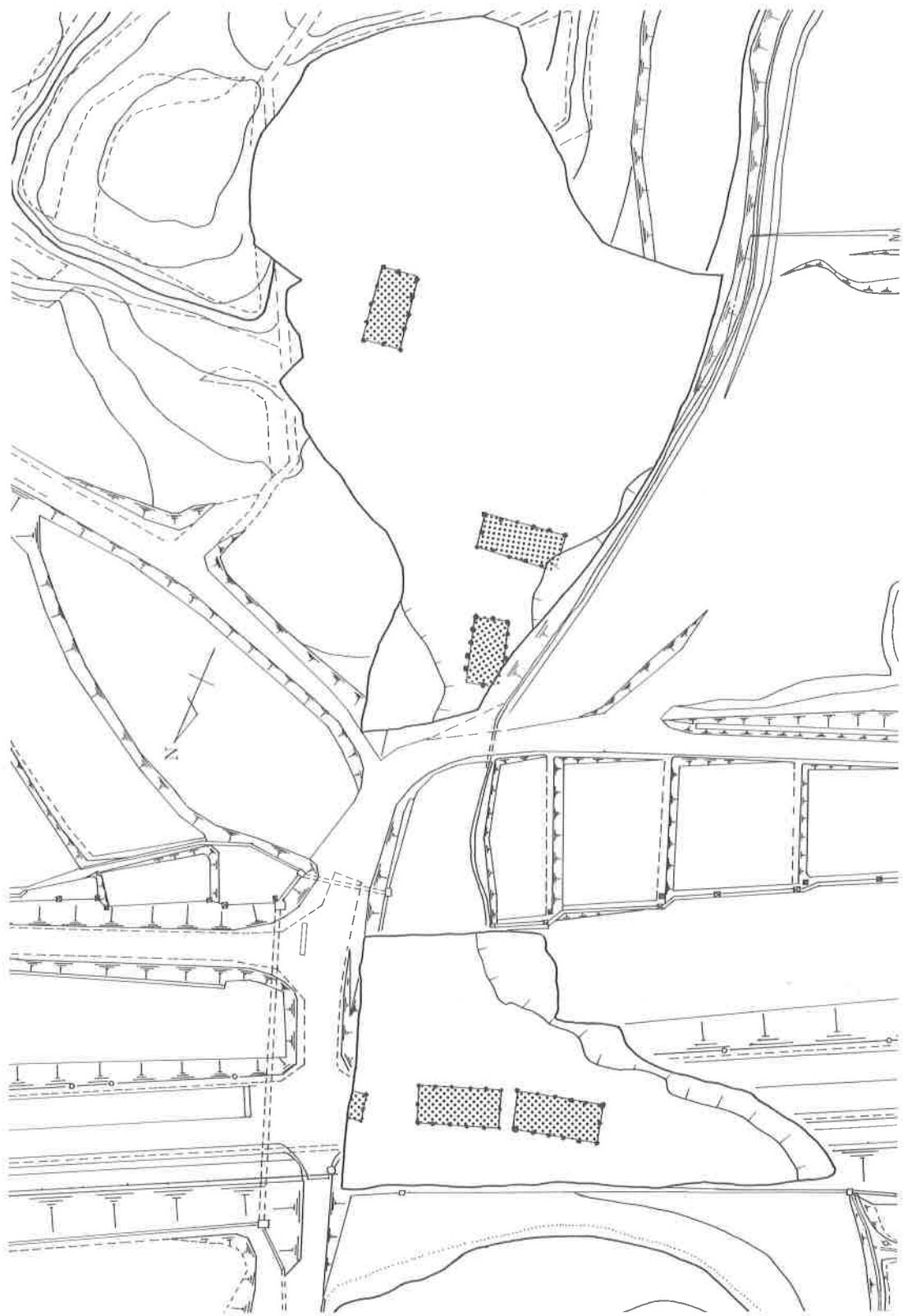
2. 出土遺物

谷部包含層出土のものが大半である。奈良末～平安初頭の土師器、須恵器が主体を占めるが、越州窯青磁、緑釉陶器も多く、丘陵全体を踏まえた遺跡の性格を考えなければならない。また、土師器については、前原市の波多江遺跡で、若干の研究はされているものの、糸島地区全体の研究は進んでおらず、型式、編年など今後の研究に好材料を得たと言える。

3. 曲り田周辺遺跡の掘立柱建物群について

本調査地点より3棟の掘立柱建物が検出された事は、先にも述べたが、隣接するバイパス調査地点（曲り田遺跡・昭和54年～55年度）からも2棟の掘立柱建物が検出されている。また、同地点北側にも比較的しっかりととした台地が続く事からも建物自体の数は、増える可能性は高い。今後の調査によるところは大きいが、丘陵鞍部を中心に規模の大きな建物が立ち並ぶ事は確実と言えよう。

次に出土遺物について検討してみたが、本調査区では、2号掘立柱建物周辺より、かなりの越州窯青磁、緑釉陶器が出土している。また、本地点の真裏にあたるIV地区では、「松」と

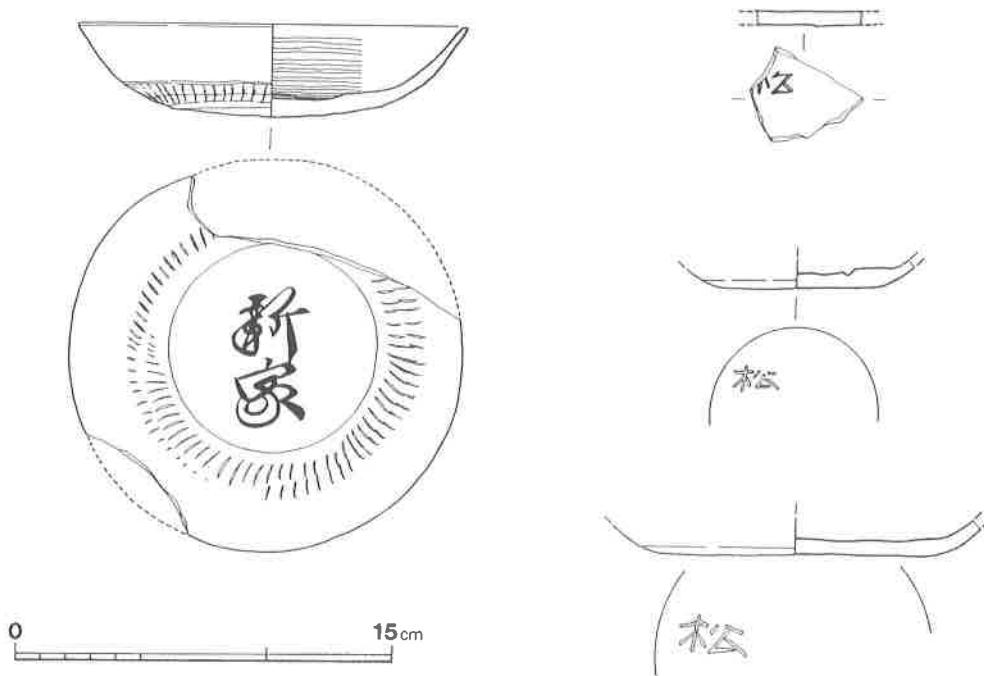


第32図 石崎丘陵掘立柱建物配置図 ($S = 1/750$)

記された墨書土器が出土したのを始め、越州窯の瓶、緑釉陶器が出土していた。こうした墨書土器については、バイパス調査地点において包含層出土ではあるものの、当時より注目されていた資料として「新家」と書かれたものがあり、こうした遺物から考えても同丘陵の性格を単なる集落としてでは理解しがたいものと言える。

曲り田遺跡及び周辺での遺跡の性格については、バイパス調査時、担当者の橋口達也氏も着目しており、「国府或いはそれと直結したような官衙の未確認である地に、当時の貴重品であった磁器を所有し得た階層は如何なる人々であったろうか。」「奈良期或いは平安初期において字を書き得る性格の階層の存在をも認めればなるまい。墨書「新家」については、意味は明かではないが、或いは“本家”が近辺の他所にあって、それに対しての“新家”が本遺跡に存在したものかとも想定される」と見解されている。

先にも記述したが、鞍部という丘陵の入り込んだ立地で、比較的高所に当たる部分に立ち並ぶ2間×5間の建物群、墨書土器の存在、豊富な磁器類、また、付設の生産遺構としての製鉄炉群、これらの所要素を踏まえ、総体的に考えてみると同遺跡は、官衙的性格に近いものと考えたい。



第33図 曲り田出土の墨書土器 (S = 1 / 3)

IV. おわりに

平成2年度より開始した曲り田周辺遺跡報告書刊行事業は、本報告書をもって、終了となる。しかし、最終報告でありながら、紙面の関係上、まとまりのない報告文になった事をここでお詫びし、心残りではあるが、本調査の一応の終了としたい。また、この調査において出土した遺物、遺構については、特筆すべきものが多くあり、糸島地区の考古学研究に役立つものである。いずれ、機会をみてまとめてみたい。

最後に発掘調査時より報告書作成事業までの長きに亘り、多くの方々からご協力、ご助言を賜った事に対し、末尾ではあるが感謝の意を表して、本書の終わりとしたい。

調査指導・協力者

橋口達也（福岡県教育委員会）・中間研志（福岡県教育委員会）・小池史哲（福岡県教育委員会）・池辺元明（福岡県教育委員会）・大澤正巳・武末純一（福岡大学）・本田光子（別府大学）・川村 博（前原市教育委員会）・岡部裕俊（前原市教育委員会）・角 浩行（前原市教育委員会）・河村裕一郎（志摩町教育委員会）・宮崎晶之（二丈町教育委員会）・村上 敦（二丈町教育委員会）・津國 豊（二丈町教育委員会）・塩地潤一（別府大学生）・須古井陽子（福岡大学生）

図 版

図版 1



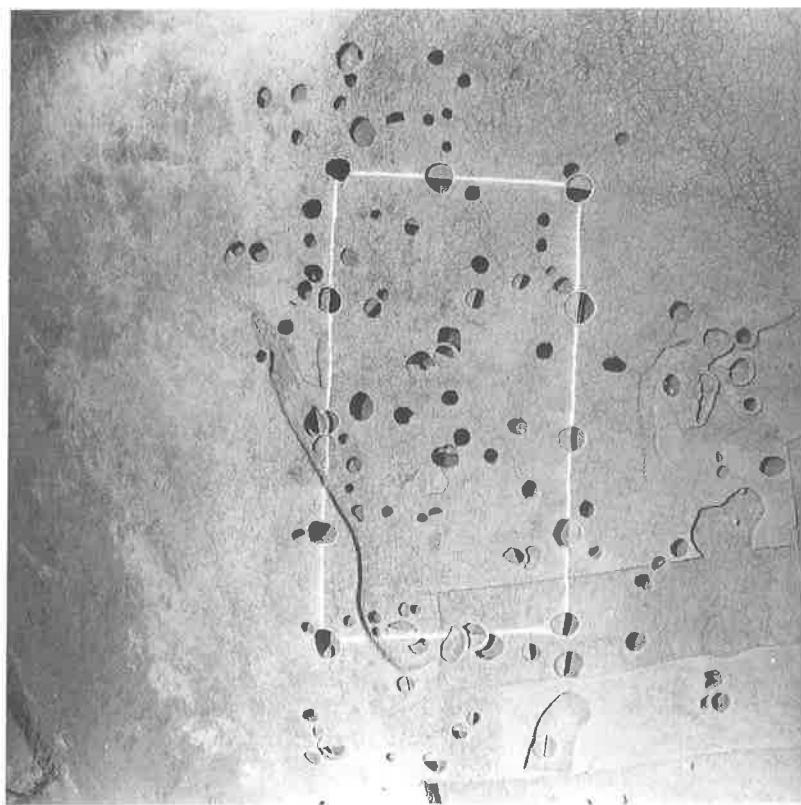
a. IX 地区全景
(丘陵西端を望む)



b. IX 地区全景
(真上から)

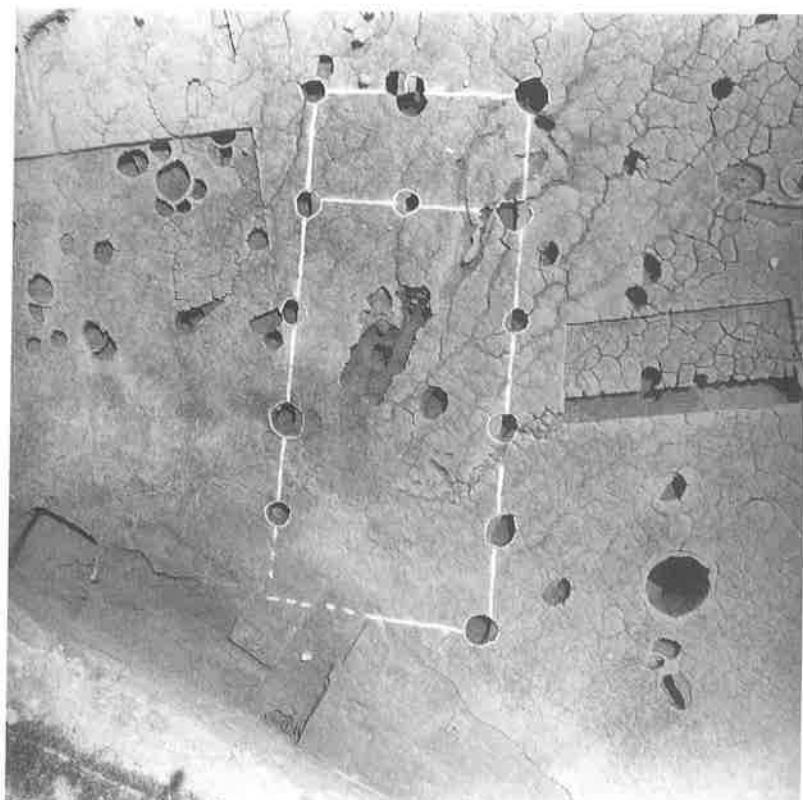


a. IX 地区全景
(北側より)

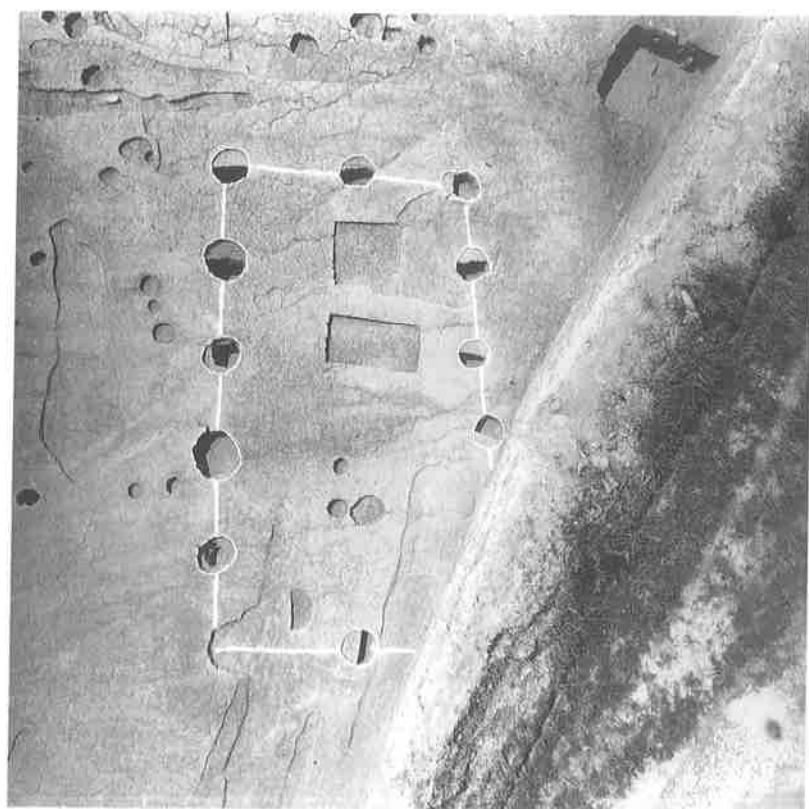


b. 1号据立柱建物

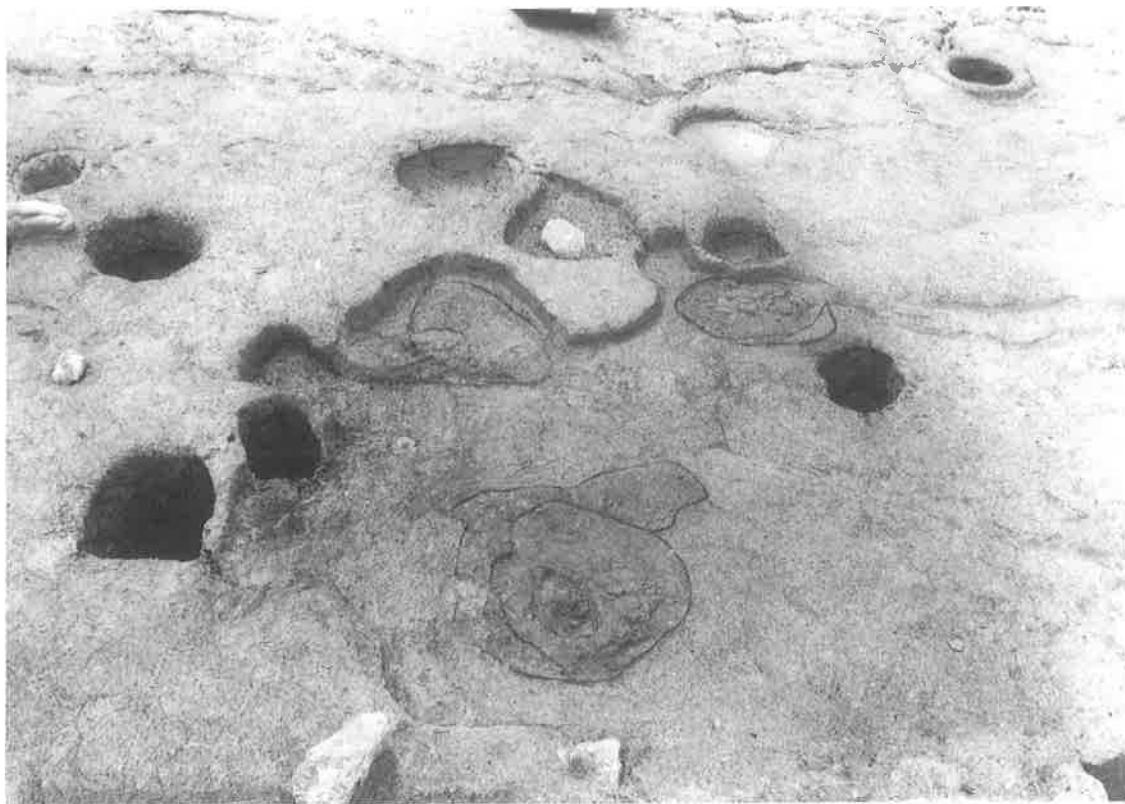
図版 3



a. 2号掘立柱建物



b. 3号掘立柱建物



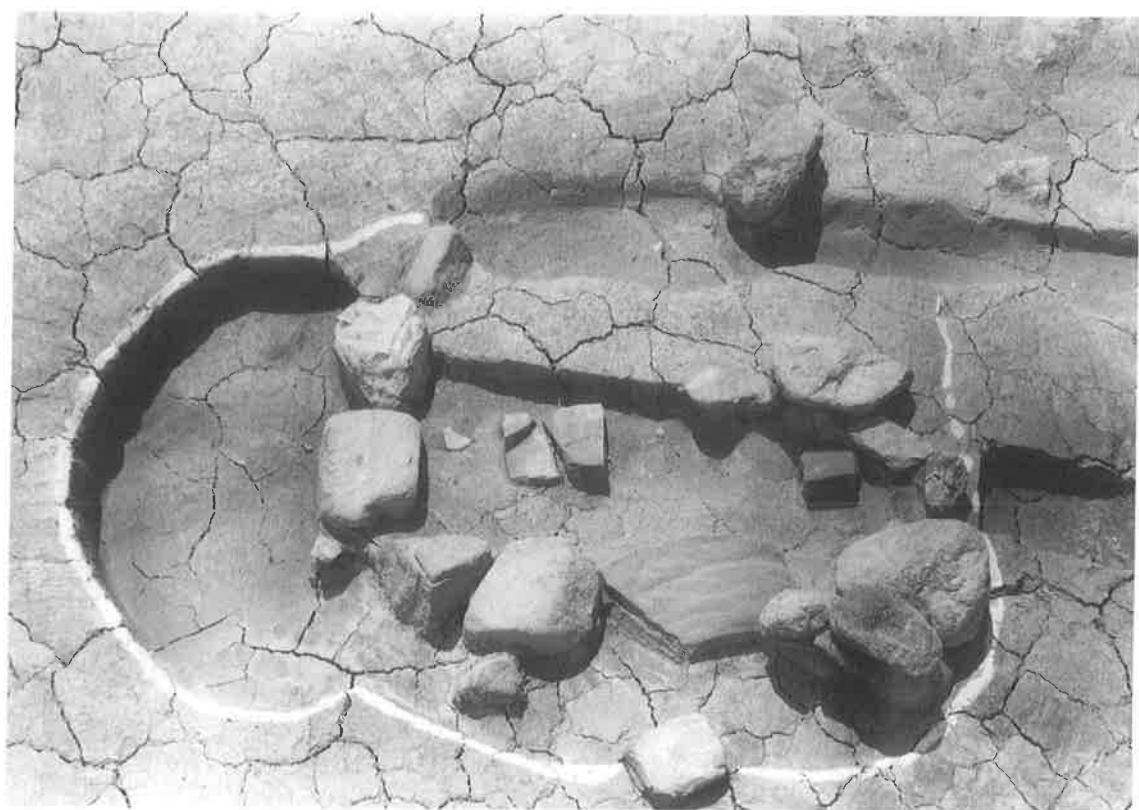
a. 製鉄遺構 検出状況



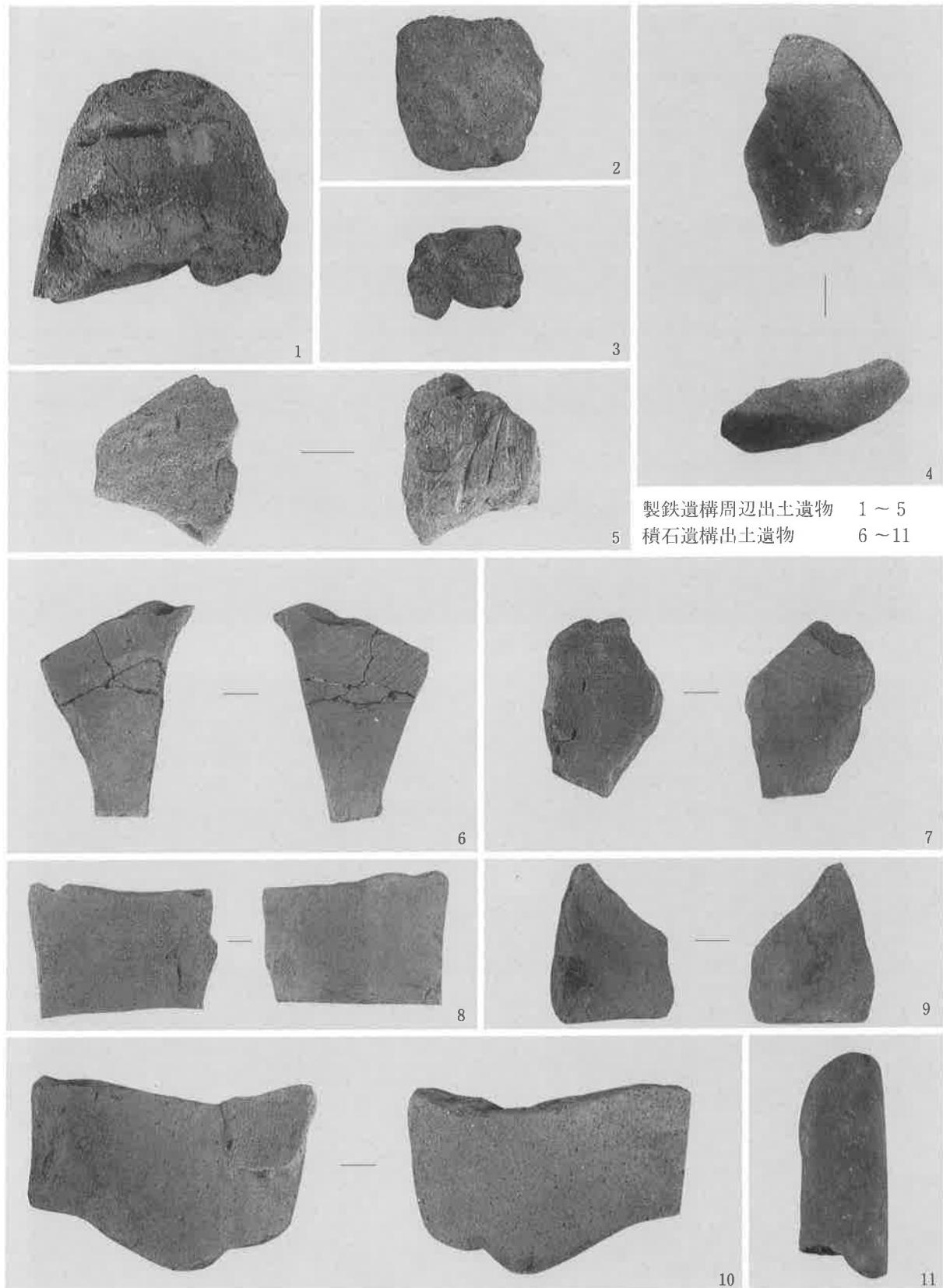
b. フイゴの羽口 出土状況



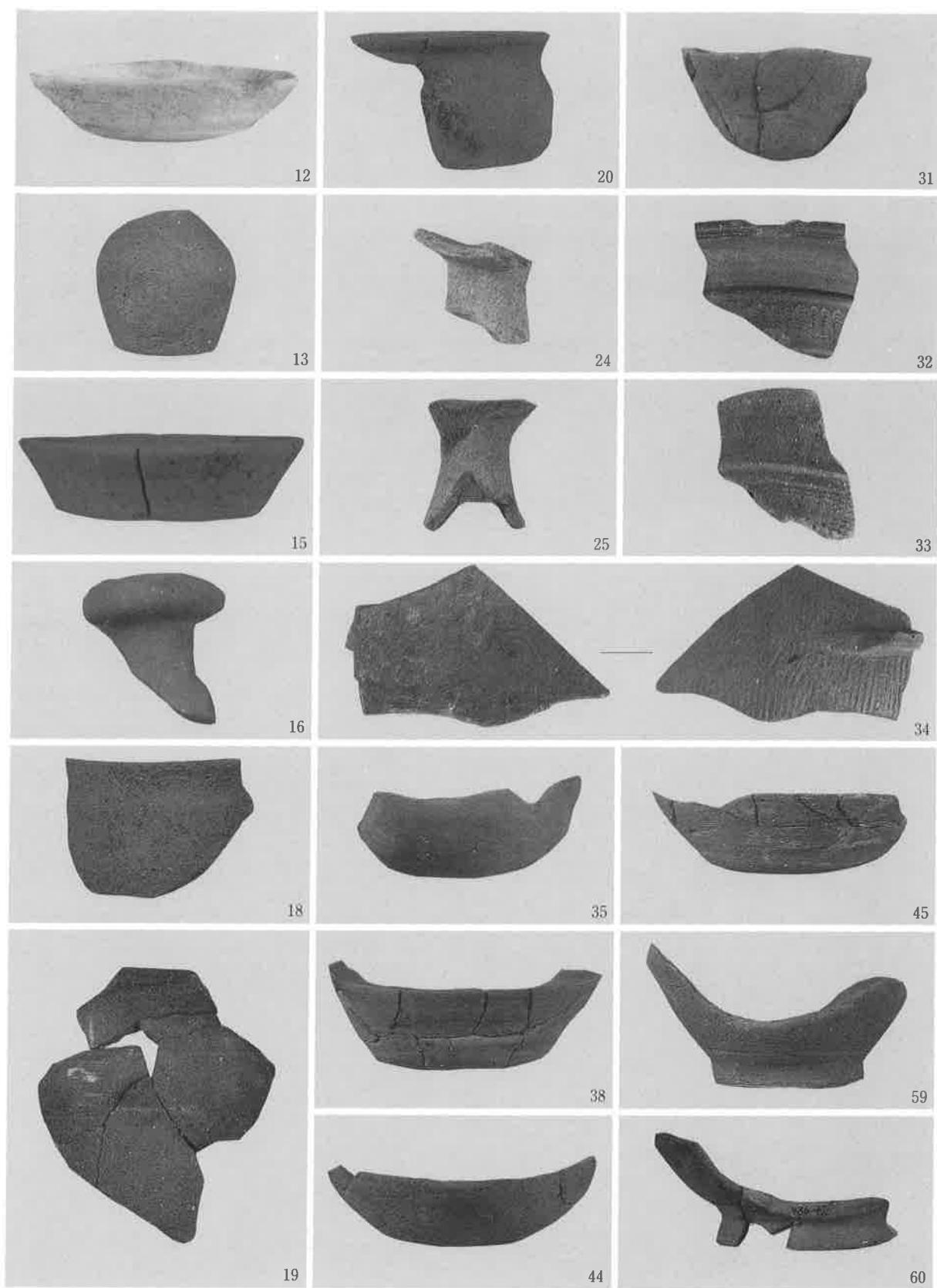
a. 積石遺構 (検出状況)



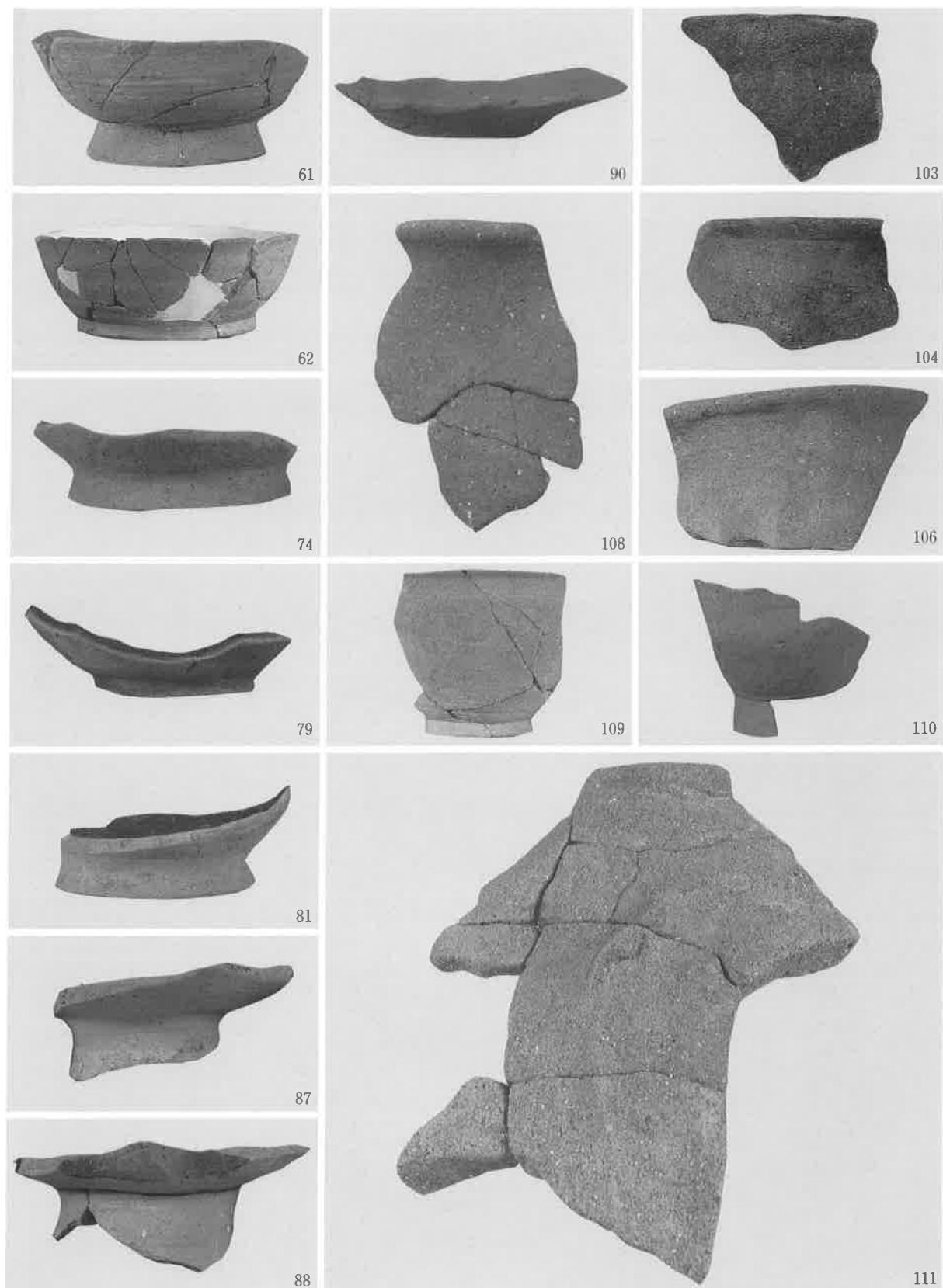
b. 積石遺構 (完掘状況)

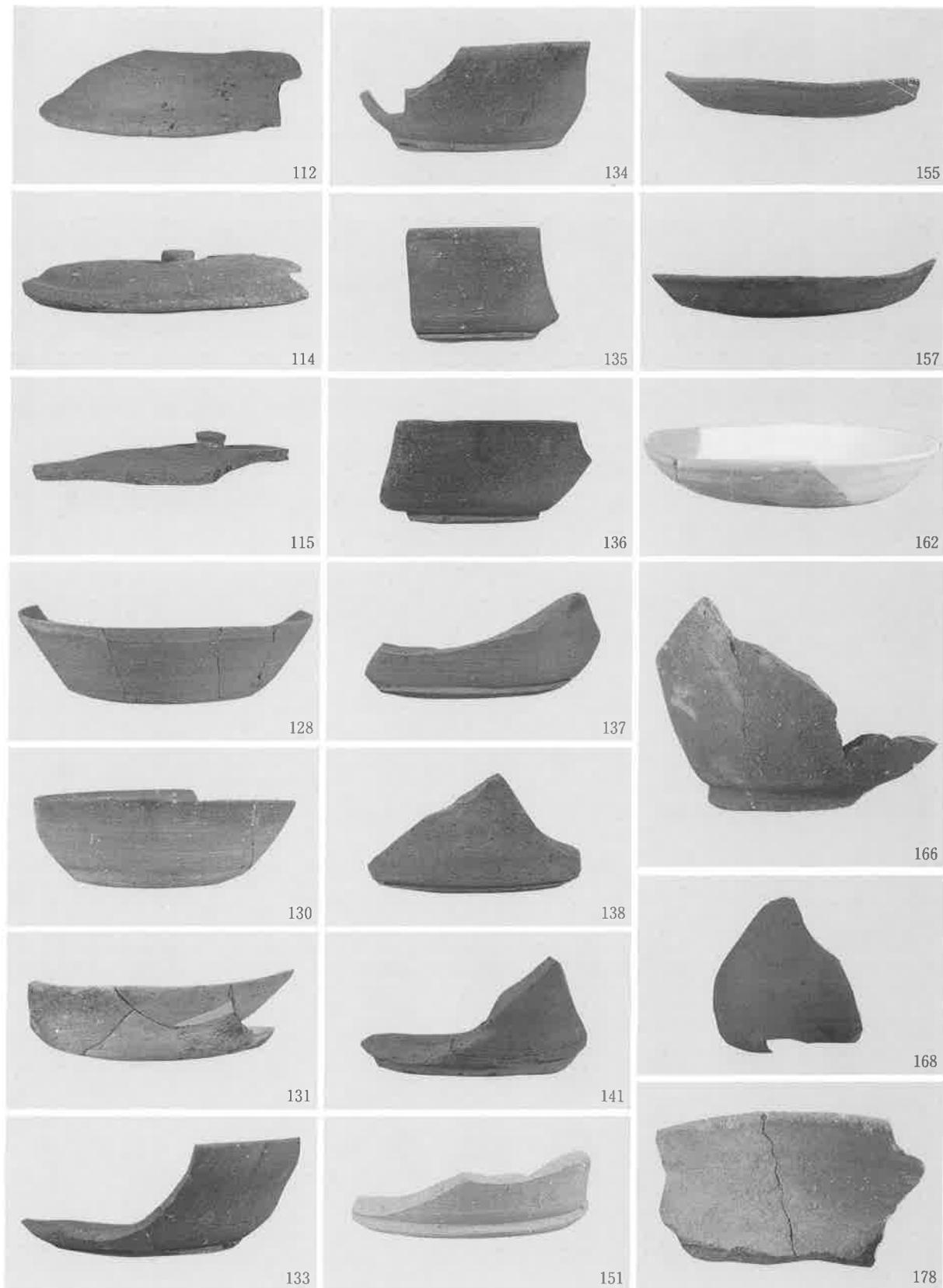


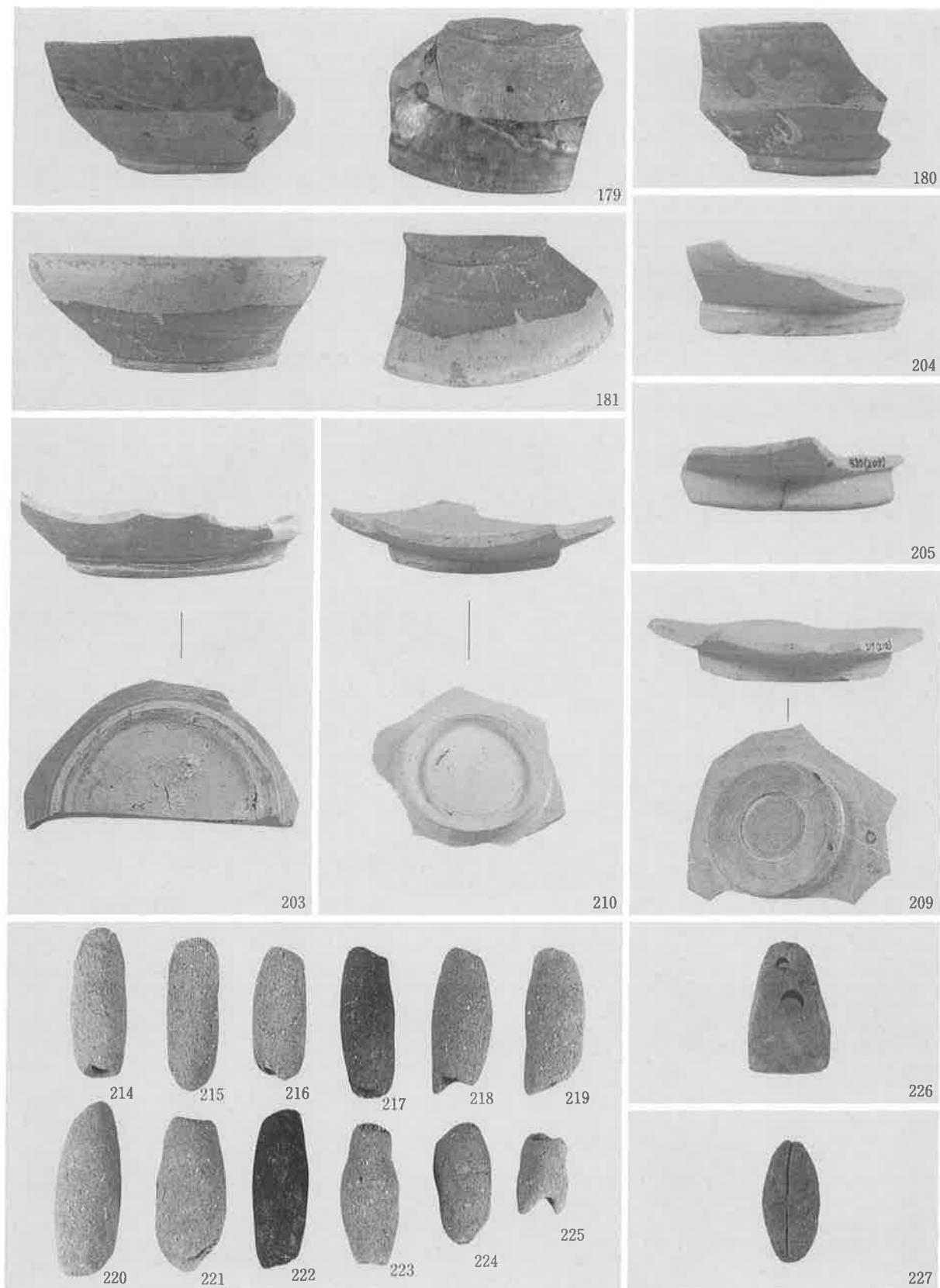
図版 7



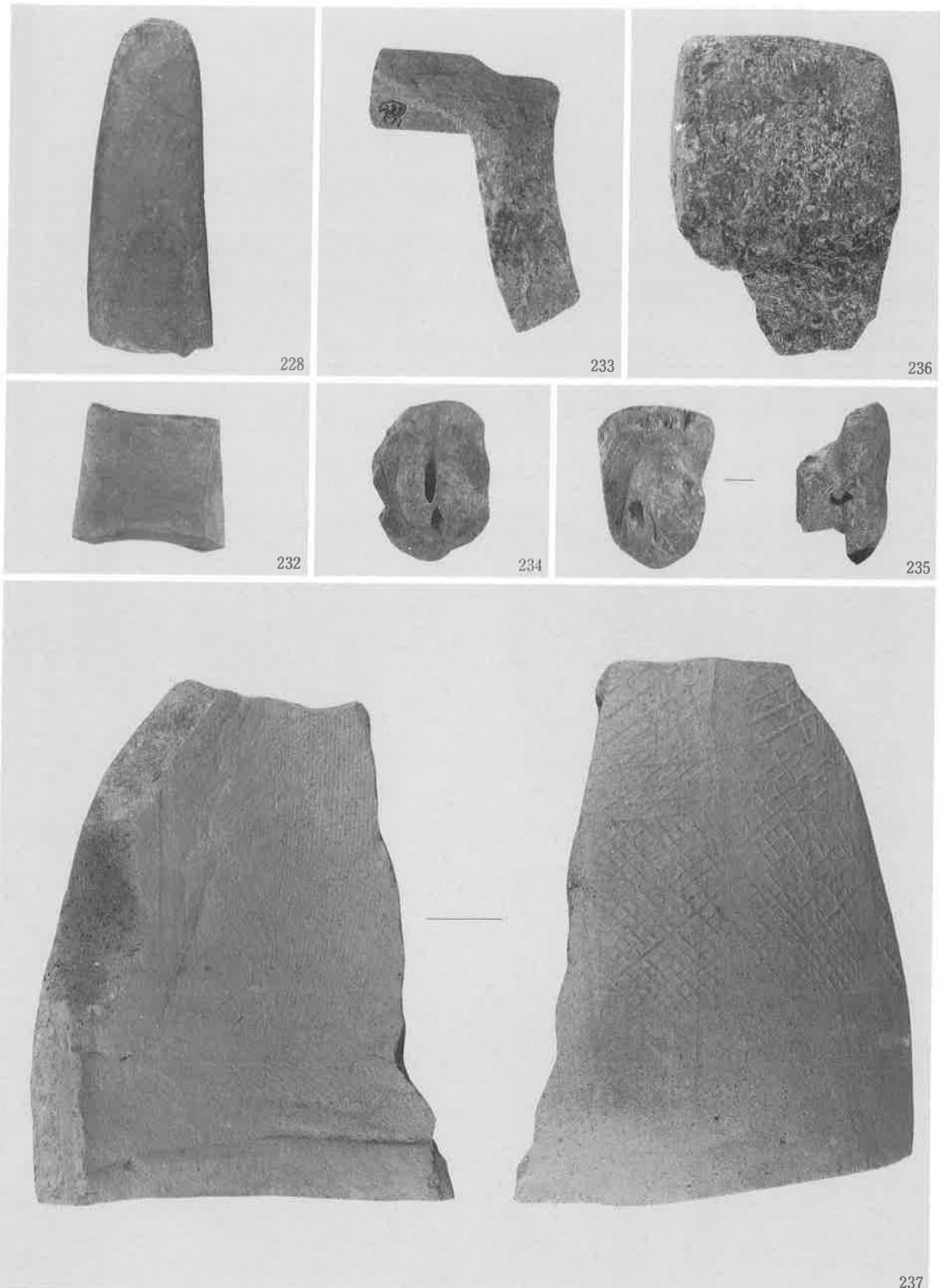
図版 8

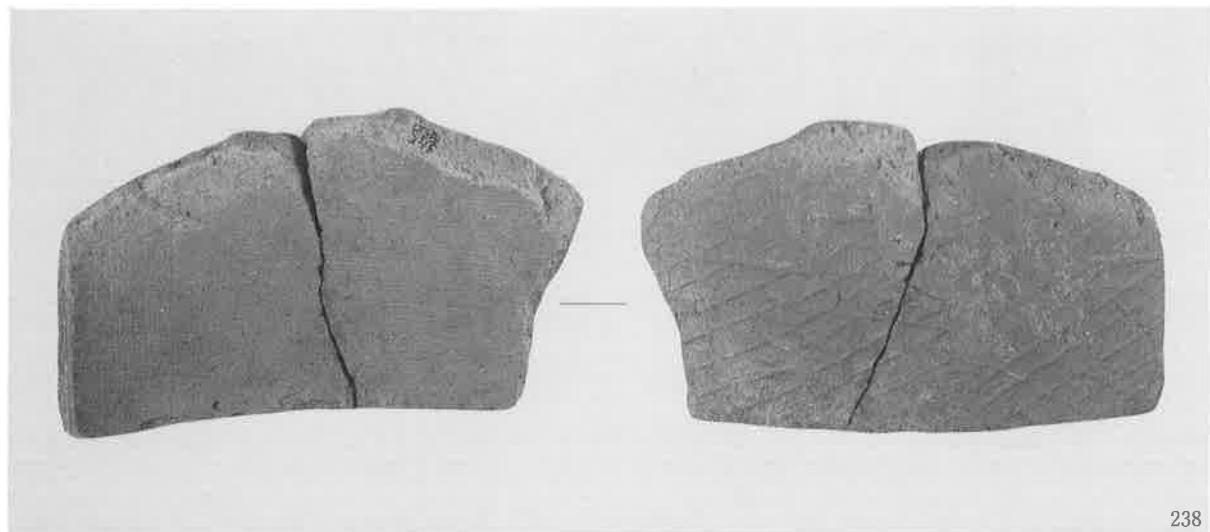




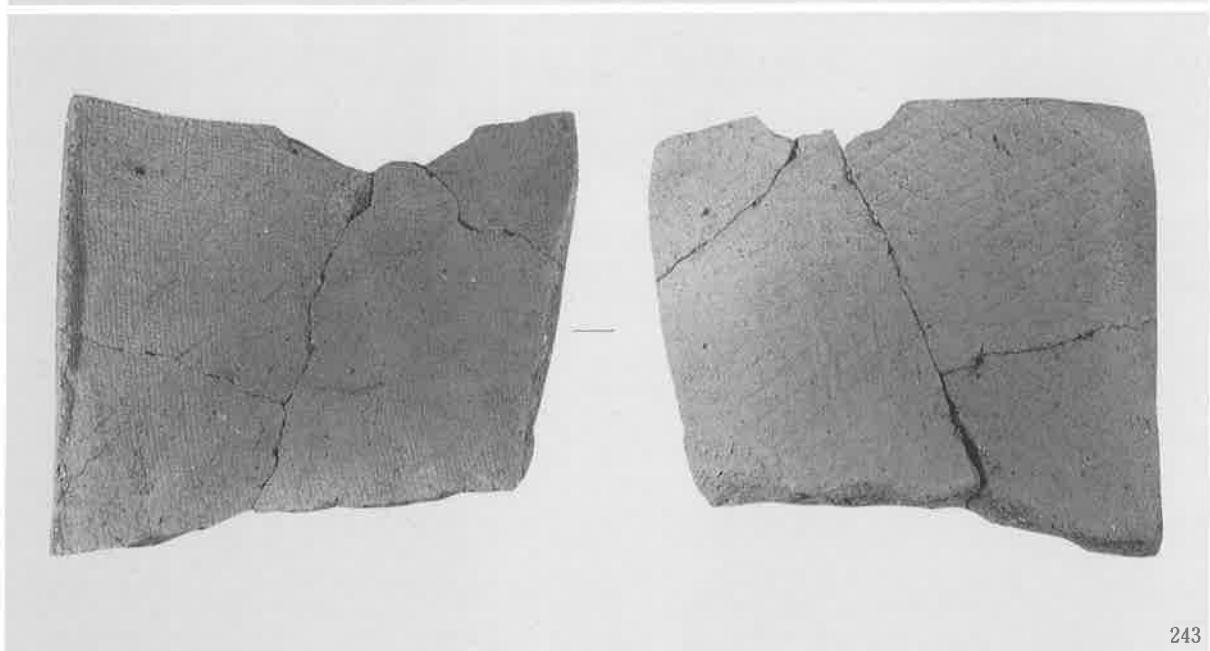


図版11

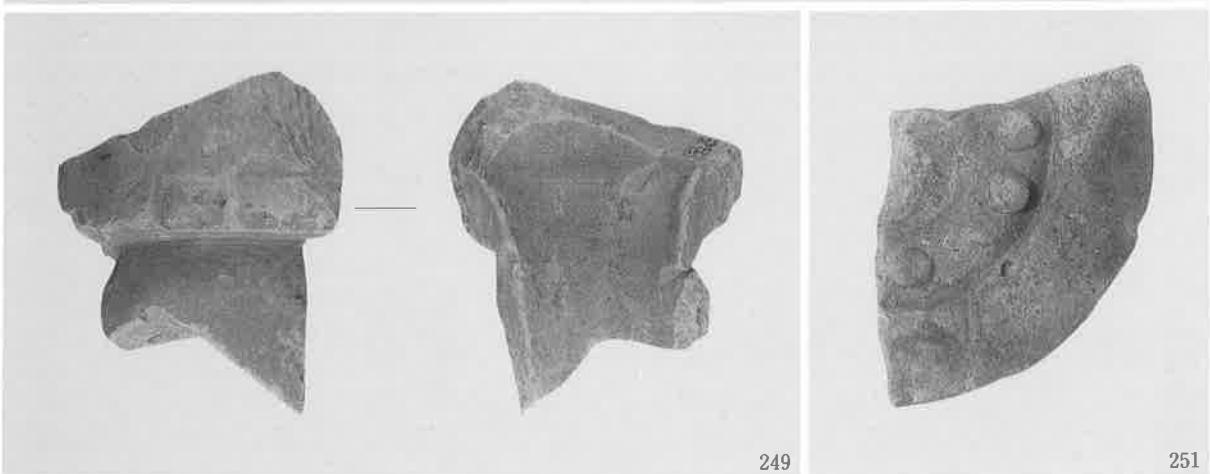




238



243

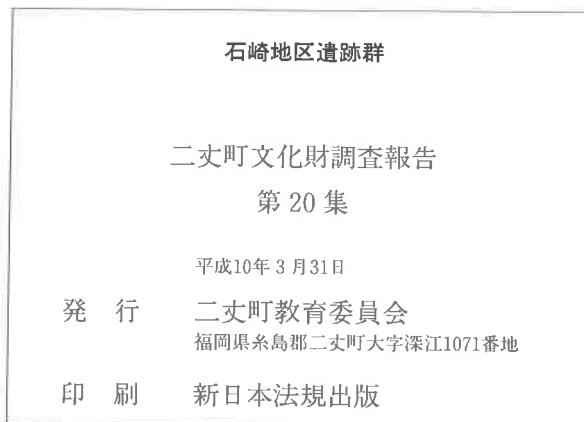


249

251

報告書抄録

ふりがな	いしざきちくいせきぐんまがりたしゅうへんいせき						
書名	石崎地区遺跡群曲り田周辺遺跡						
副書名	福岡県糸島郡二丈町大字石崎所在遺跡群の発掘調査						
巻次	VI						
シリーズ名	二丈町文化財調査報告書						
シリーズ番号	第20集						
編著者名	古川秀幸						
編集機関	二丈町教育委員会						
所在地	福岡県糸島郡二丈町大字深江1071番地 TEL092-325-1111						
発行年月日	西暦1998年3月31日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯 遺跡番号	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
曲り田周辺 遺跡	福岡県糸島郡 二丈町大字 石崎	40462		33度 30分 53秒	130度 9分 49秒	910402 ～ 910524	2,600 町スキー公園
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡	主な遺物	特記事項		
曲り田周辺 遺跡	集落跡	奈良～ 平安時代	掘立柱建物3棟 製鉄遺構3基	土器 須恵器 磁器 瓦			
印 刷							







II. 発掘調査の記録

1. 調査の概要

IX地区は、石崎丘陵南半の西側緩斜面にあたり、南から北へと狭い谷が走り、谷部の南肩部から谷中央部を中心に遺構が集中している。これまでの同丘陵の調査でも同様の状況であったが、谷であろうと面的にしっかりとした場所には、居住区等を構えているものの、締まりのない場所には、生活面を持たず、IX地区でも谷の北肩部にはまったく遺構が存在していなかった。また、谷中央部の遺構面直上には、弥生～平安期の厚い包含層が形成されていた。今回、検出された遺構は、比較的規模の大きい掘立柱建物3棟、製鉄炉3基、性格不明の積石遺構1基、柱穴状ピット群である（第3図参照）。以下、順次、説明を加えたい。

2. 出土遺構

1号掘立柱建物（第4図）

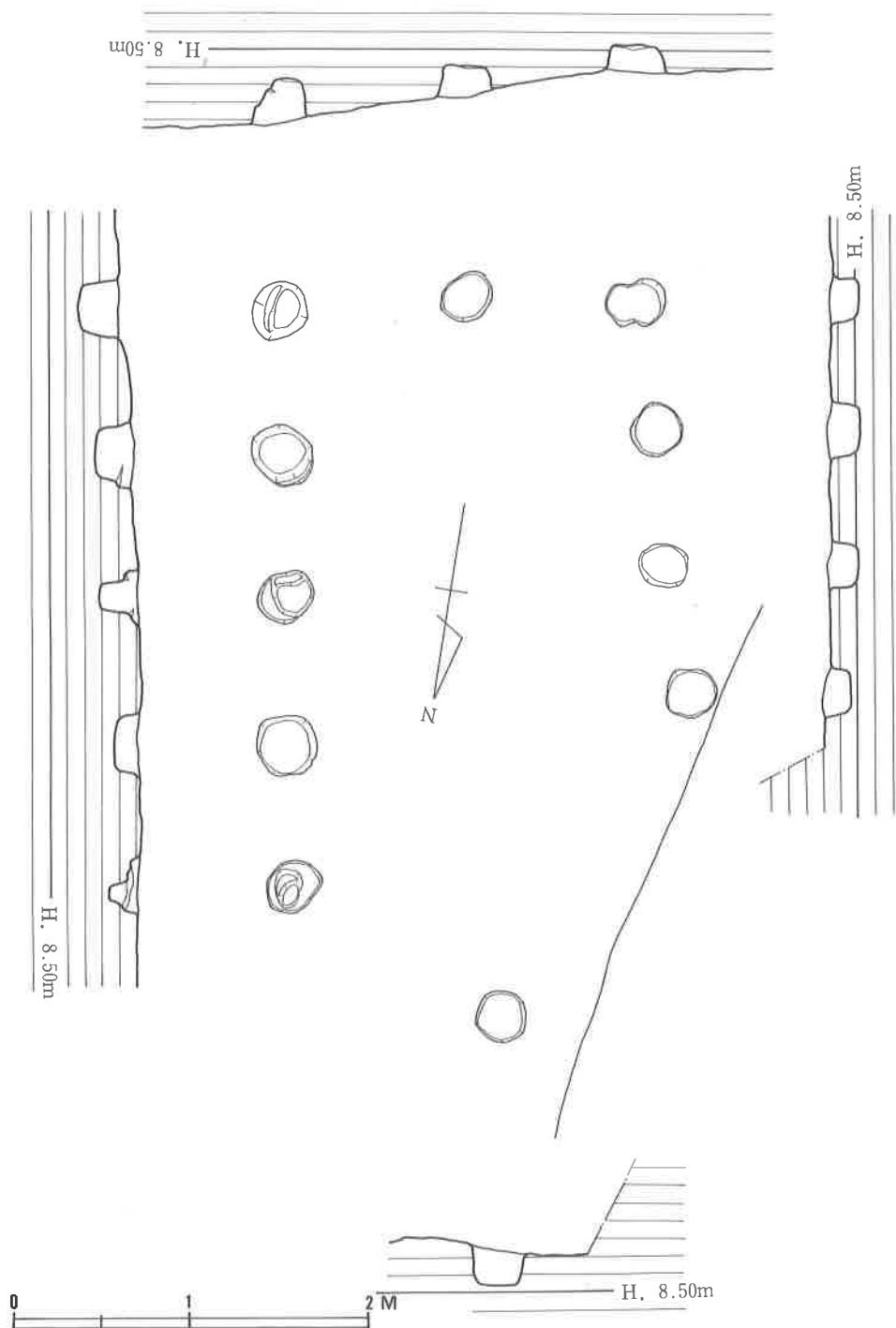
谷中央部の北側に位置し、南北に主軸を持つ。一部、調査区外に伸びるため、全容は不確かではあるが、2間×5間の建物であろう。柱間は南北方向180cm、東西方向が200cmを測り、柱穴の径はほぼ60cmである。時期は確証はないものの包含層の遺物やこれまでの調査から見て、奈良時代末～平安時代初頭と位置付けてよいものであろう。

2号掘立柱建物（第5図）

谷中央部の北側に位置し、東西に主軸を持つ。現状では、2間×5間と検出しているが、東側の柱穴は浅い。このため、同建物の主柱とは考えにくく、庇的なものととらえた方が妥当であろう。また、西側は黒色の粘質土の遺構面となるため、検出できなかったものの、1間分の柱穴が存在するものと考えられ、やはり、2間×5間の建物であろう。柱間は東西方向220cm、南北方向が200cmを測り、柱穴の径はほぼ60cmである。時期については、やはり、奈良時代末～平安時代初頭と考えている。

3号掘立柱建物（第6図）

谷東肩の高い部分に位置し、1号掘立柱建物同様、南北に主軸を持つ。規模は2間×5間であり、柱間は南北方向200cm、東西方向が240cm、柱穴の径はほぼ60cmを測る。時期は、1、2号建物同様、奈良時代末～平安時代初頭と考えている。



第4図 1号掘立柱建物実測図 ($S = 1/80$)



第3図 遺跡全体図 ($S = 1/300$)